
夢の国のカナン

雷星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の国のカナン

【Nコード】

N0873L

【作者名】

雷星

【あらすじ】

天から投げ落とされる夢を見た。
陰府へ。
墓穴の底へ。

夢の都と謳われた都市ガルナバで、カナンの物語が動き出した。
虚構と現実が交差し、夢と幻が交錯する。
なにが本当で、なにが嘘なのか。

なにが真実で、なにが幻想なのか。

入り乱れる光彩は、カナンになにをもたらすのか。

天使が歌い、悪魔が踊る、コメディチックバトルファンタジー。

第四夜 悪しき夢の淵へ（4） 2011・12・2公開

第一夜 夢の都の白昼夢（１）

カナンの朝は、遅い。

彼の重い瞼が開くのは、いつも時計の針が十時を回ってからだった。

寝癖でぼさぼさの黒髪と、どこか醒めたような目が印象的な少年。濃い睫毛に縁取られた眼の虹彩は、淡い青さを湛えている。下着一枚しか身に付けていない身体は、貧相ではないが華奢と言えるだろう。

彼は、欠伸を洩らして、ゆっくりと上体を起こした。ベッドの上自分の居場所を確認するように室内を見回す。

狭い部屋だ。白い壁に四方を囲まれ、小さな窓が申し訳なさそうに口を開けている。青空模様のカーテンが風に揺れていた。瓦礫のように積み上げられた無数の本が開いたままで、寝る前に脱いだ衣服も無造作に放り投げられていた。

カナンが、寝ぼけたままぼーっとしていると、突然、ドアが猛烈な勢いで連打された。寝起きの頭に響く。

「カナっち！ 早く起きないと遅刻するよ！」

舌足らずな男の声だった。カナンの弟、クオンだろう。

「遅刻……？」

カナンはいぶかしげに首を傾げながらも、とりあえずベッドから飛び降り、すぐにロックをはずしてドアを開けた。ノックの連打をやめさせるためだけだった。

「まさか忘れたの!？」

ドアを連打する体勢のまま、クオン。くりつとした大きな眼が愛らしい少年である。光彩はカナンと同じで、この造作は少し違う。透き通るような白い肌をしていて、頬は常に紅潮しているように見えた。ぷっくりした唇は、朱が差したように赤い。その顔立ちとお下げにした黒髪のせいで、女の子に間違われることもしばしばだった。

た。が、本人は気に入っているの、髪形を変える気はないらしい。そのくせ、女に間違われると怒るといふ困った少年なのだ。歳は力ナンと四つ違いの十四歳。小柄な体を、流行の衣服で包んでいる。「なんだっけ……？」

カナンは、後頭部を掻きながら寝ぼけ眼で弟を見ていた。常にせわしなく動き回る小動物を観察するのは面白い。

「がーん」

と、クオン。そのまま廊下に座り込んで膝を抱える。

「いちいち効果音をつけるな……うつつしい」

「だって！ 大事な約束を忘れるなんて、弟として恥ずかしいんだもん！」

目に涙を溜めながら叫んできた弟に、カナンは嘆息交じりに言い返した。

「その大事な約束を早く言えよ。遅刻するんだろ？」

「そうだよ！ 今日はドウアアブルディエエエエトの日でしょ……！」

ハイテンションなクオンについていけず、カナンは、さっさと部屋奥に戻った。着替えるためだ。

「そういや、そんな話もあったようななかったような……」

頭の中の奥の奥まで探るようにながら、カナンは、安っぽいクローゼットに向かった。背後から怒鳴り声。

「あったよ！ 早く着替えてよ！ 待ち合わせは駅前の広場に十一時だよ！」

「だったらもつと早く起こせよ」

とは、カナンは言わない。自分で起きるのが道理だし、弟にそこまで依存するのもどうかと思うのだ。

「デート……デートねえ」

「カナちゃんが約束したんでしょ！」

「だれと、だっけ？」

「さっ、最低だあ！ 神様、どうかこのぼくのどうしようもなく最

低最悪で珍妙奇天烈な兄に猛烈で強烈な天罰を下してくださいませ」
床に膝をつき、胸の前で手を組んで頭上を仰ぐ少年の姿は、どこ
からかスポットライトを当てられているかのように輝いて見えた。

「おまえが言うとは本当に天罰下りそうだな」

ぼやいて、カナンは窓の外を見やった。揺れるカーテンの隙間か
ら、あざやかなまでの晴天が覗いた。

「どうせなら下っちゃんばいいと思うよ」

にこやかに追い打ちをかけてくる弟を無視して、カナンはそそく
さと着替えるのだった。

そう、それはいつもと変わらない日常の風景。

いつまでも続くと信じて疑わない薔薇色の日々。

平和で、安らかで、大きな事件も事故もなく、誰もが健やかな毎
日を送っている。

けれどもカナンには、言い知れぬ不安があった。

（俺は、いつからこうしてここで暮らしているんだろう……？）

どれだけ頭の中を覗いても、何度考え直してみても、思い出せな
いことがある。

記憶の中の空白。

そのぽっかりあいた無数の穴が埋まって、自分の記憶が完成した
とき、すべてが失われるような、そんな感覚。

しかし、そういった不安は、日々の喧騒が忘れさせていくのだが。

ガルナバ。

それが、この夢の都に付けられた名前であることは、歩道を走り
回る子供ですら知っているだろう。もしかしたら、言葉も話せない
赤子ですら知っているかもしれない。

人口五百万を越す大都市であることは周知の事実だ。戦乱の時代

に築かれたという長大な円形の防壁の内側に、用途や業種ごとに整理された五つの区画があり、単純計算ではそれぞれの区画に百万もの人間が住んでいることになるという。

中央には、市庁舎を始め行政関連の建物が集中する直轄区があり、ガルナバのシンボルとも言える全長三百メートルに及ぶ天使の像が聳えている。その女性形の天使は、一對の翼を持ち、叡智の額冠を身につけ、天に掲げた右手には未来を照らす希望の松明が握られ、胸元の左手にはすべての生き物の過去を記したという生命の書が抱かれている。

北に商業区、西に工業区、南に学業区があり、このガルナバでもっとも賑わっているのが、東に位置する興行特区である。

興行特区の外観はテーマパークさながらであり、古今東西さまざまな町並みが入り乱れ、ある種の混沌を生み出している。

その整合性のない極彩色の街では、毎日のようにパレードが開催され、数多の催し物が引つ切り無しに咲き乱れるのだ。興行特区こそ、夢の都の代名詞であり、ガルナバに訪れたものならば一度は足を運ぶべきだろう。

「なにいまさらガイドブックなんか読んでんの？」

と、クオン。目深にかぶったフードから覗く半眼は、疑わしいものでも見るようなまなざしとも言えた。

彼は、ストライプのシャツの上に、薄手の白いパーカーを来ている。短パンから伸びる素足は、人目を引いてやまない。

「復習だよ、復習」

適当に答えて、カナンは、ガイドブックから腕時計に視線を移した。時計の針は十時五十八分を差したところだった。

カナンはというと、いつも着ている黒の上下に、クオンと同じ白のパーカーという恰好である。弟とペアルックというのはどうなのかと思うのだが、無理矢理着せられたのだから仕方がない。

通り過ぎるひとびとの視線が、そこはかとなく痛い、カナンは強引に無視していた。

商業区中央駅は、商業区五番街にあるカナンたちの住むアパートから程近い場所にある。

ガルナバの鉄道は、いくつもの環状の路線が直轄区を中心とした同心円を描くように走り、それ以外にも無数の路線が蜘蛛の巣のように張り巡らされている。その鉄道が、ガルナバの主な交通機関である。

駅前の広場にはわりと大きな噴水があり、それを取り囲むように羽を持つ獅子の石像が八体、設置されていた。

ふたりは、その噴水の縁に腰かけて、駅の構内から出てくるひとを観察したりしていた。

空は晴れ渡り、わずかな雲がゆっくりと泳いでいる。柔らかな日差しは心地よく、吹き抜ける風が運ぶ食べ物の匂いは、空腹気味のカナンには辛すぎた。

「で、今日はどうすんだっけ？」

カナンは、あくびを漏らしながらクオンに目を向けた。彼の弟は、なぜか噴水の縁で逆立ちをしていた。暇だったのかもしれない。

「デートでしょー！」

半ば呆れながら、クオン。

「それは聞いた。散々聞かされた。相手はエリザとサラだろ？」

エリザは興行特区のレストランで、サラは商業区のカフェで、それぞれウェイトレスとして働いている。カナンの記憶では、エリザは金髪の美女で、サラは栗色の髪の素朴な少女だった。

いつどこでどうやってデートの約束を取り付けたのかは思い出せなかった。

「わかってるんならよろしい」

クオンが、逆立ちの態勢のまま腕のばねだけで飛び上がって見せる。滞空時間が長い。空中で三回転して、見事に着地した。周囲で歓声上がる。

「よろしくねーよ。デートの内容の話だろ」

カナンは、苦虫を噛み潰したような顔で、観衆に笑顔を振り撒く

弟を見ていた。

「なんだ、そんなことか」

クオンがカナンを振り返ったのは、観衆が立ち去ってからだった。
「今日は十月三日——市民の日だよ」

この夢の都ガルナバが生まれた日でもある。最初は、直轄区の中
心区画ほどの小さな街だったらしい。それが、現市長ラザードの八
面六臂の大活躍により、大陸最大規模の都市にまで発展したのだ、
市民の日は、そんな小さな街であったところを偲び、初心を忘れず
邁進していこう、というために作られた市民の休日である。

市民の日は、公務員以外はほとんどの仕事が休みとなり、だれも
が安らかな一日を満喫するはずだが。

「パレードか」

「ピンポーン！ 大正解！」

市民の日には、盛大なパレードが行われるのが恒例となっている。
ふたりが生まれる前から催されているその行事が最初に開催された
理由は、市民の休日を盛り上げるためだったらしい。

いまでは、夢の都ガルナバ最大のお祭りとして、大陸全土から観
光客が訪れ、それを目当てに休みを取り止める店も多い。

もはや、市民の休日とは名ばかりで、ガルナバを上げた一大騒ぎ
となっていた。

「でも、そんな大事な日を忘れてるなんて、らしくないね。カナた
ん」

「カナたんつて、おまえ……」

カナンは頭を抱えなくなった。以前から薄々感じてはいたことだ。
コロコロと変わる呼び方に、多少の疑問を抱くのは当然だろう。

カナンは、半眼でクオンを見やった。彼の弟は、まるで子供のよ
うに、広場をうろつく鳩を追いかけている。

「兄に対する敬意というものがないのか？」

「あるわけないじゃん！」

こちらを振り向いた少年は、実際にこやかな表情を浮かべていた。

一点の曇りもない、宝石のような笑顔。だれが見ても満点をつけるだろう。

実際、カナンから見ても、文句のつけようのない笑みだった。

「ぐうたらでろくでなしで仕事もせず、毎日ほつき歩いては女をたぶらかして、うちに帰ってくれば部屋に籠って本を読みあさり、起きるのはお昼前——」

クオンが、それなりに大きな声で不平不満を連ねながら、鳩を容易く捕まえて見せる。鳩は、まるで捕まったとも思っていないかのように、身動きひとつしない。

「そんなひとを兄として敬うだなんて、とんでもない話だと思いませんか？」

急に真面目な顔つきになって、クオン。鳩が解き放たれる。

「なんで俺に聞くんのだ、俺に」

青空に向かって飛び立った鳩を目で追いながら、カナンは、嘆息した。

「ハッロー！ 待ったあ？」

「お待たせしてすみません」

あっさりとしたあざやかな赤、しっとりとした穏やかな青——帯びる色彩の異なるふたつの女声が、ほぼ同時にカナンの耳に届いた。

『いや、全然！』

カナンとクオンが首を横に振ったのは、まさに同時だった。

第一夜 夢の都の白昼夢（2）

エリザ・ベスは、カナンの記憶通り金髪の美女だった。ショート
の金髪が眩しいくらいに輝いていた。カジュアルなシャツにパンツ
ルックで、サングラスをカチューシャかなにかのように頭の上に乗
せている。

サラ・ブレットもまた、カナンの頭の中にあつた情報通りだった。
栗色の長髪はストレートで、化粧は控え目に見えた。淡いピンクの
上衣と白のロングスカートが、清楚なイメージを与える。

「で、わたしの相手はどっち？」

と、開口一番にエリザ。彼女は、この四人の中でもっとも背が高
かった。一番低いのは、最年少のクオンである。

「そりゃあ——」

「ぼくかな？」

カナンの言葉を遮つたのは、クオンだった。カナンが驚いて弟を
見ると、彼は悪戯っぽくエリザにウインクを飛ばしていた。

「あはは、いいね！ いい感じよ、少年！」

エリザが手を叩いて笑う。クオンの臆面もない態度が気に入った
らしい。

「ぼくはクオンだよ、エリザ」

どこか不服そうदैいて、満更でもない表情を浮かべる弟を見て、
カナンは、肩を落として嘆息した。すぐ左から、

「わたしじゃ不満ですか？」

サラは悲しそうなまなざしだった。

カナンは、慌てて答えた。

「いや、そういうことじゃなくて——」

言い訳がましくなるのを否定出来ない。

「なんか、あいつの将来が怖くて怖くて」

「可愛い弟さんじゃないですか？」

おずおずと、サラ。

「ま、それは認めるさ」

実際、そうだろう。クオンのような弟なら、だれだって欲しがるかもしれない。働き者で、家事全般を軽くこなし、頭もよく、運動神経もいいし、いつだってあっけらかんとしているから一緒にいても疲れない。口の悪さも、クオンにとっては愛嬌になるだろう。

カナンがそんなことを考えているうちに、前のふたりが歩き出した。つられて、後列のカナンとサラも歩き始める。

「やっぱり、今日はパレード？」

「そ。パレードがよく見える特等席があるんだ」

「？」

前列のふたりが盛り上がるのは無視して、カナンは、ふと後ろを振り返った。強い視線を感じたのだ。

噴水の傍にひとの姿はなく、獅子の石像が佇んでいるだけだった。

「どうかされました？」

「いや、なんでもない」

言って、前に向き直ろうとしたカナンの視界の端で、獅子の石像がにやりと笑った――

「！？」

もう一度振り返るが、獅子の石像に変化は見られなかった。

（気のせいかな……）

ただの錯覚だろう。毎晩毎晩飽きもせず徹夜しているから、そんなくだらない幻想を見てしまうのだ。言い知れぬ不安をそんな結論で打ち消して、カナンは、小首を傾げるサラに微笑みかけた。

「ほんとになんでもないよ」

「そうですか……？」

サラも背後を振り返ったが、なにもなかったのだろう。怪訝な表情で前に向き直る。髪が揺れて、芳しい花の薫りがした。

市民の日のパレードは、直轄区を中心たる市庁舎を出発して、まずは北の商業区へ。それから西、南、東の順に四つつの区画を逆時計回りに行進する。大都市だ。ゴールの市庁舎にたどり着くころには夜も更けているだろう。

もつとも、ガルナバは眠らない。

真夜中だろうと、お祭り騒ぎに興じるものも多い。

「ぼくらのように、ね」

「あはは、わたしまで仲間にしないでよ」

馬鹿笑いしながらクオンの背中をしばしと叩くエリザに、カナンは、呆氣にとられていた。弟が幸せそうな表情なのも不思議ではある。

「エリザって、元々ああいう性格なんですよ。お店では澄ましているみたいですが」

とは、サラ。

「知り合いだったのか。同じころに着たからちよつと不思議だったんだ」

「はい。学校で同じ教室なんです」

四人がいるのは、商業区中央駅にほど近い場所に建つ雑居ビルの五階、カナンの知人が経営する飲食店の一室だった。

《天の扉》と名付けられたその店は、東西のさまざまな料理を取り扱っていて、味もまずまずだろう。個室制で、ガラス張りの部屋からは、中央駅前を見渡すことができた。

「ここからなら市長の顔まではつきり拝めそうね」

エリザが、満足そうに笑う。

市長を中心とするパレードが商業区を行進するときは、決まって中央駅前の広場に止まって軽い演説を行うのだ。

そのため、この時期になると中央駅近辺の飲食店などは予約です

ぐ一杯になった。

カナンが、この《天の扉》の一室を予約できたのもたまたま偶然に過ぎない。友人だからといって、先客の予約を取り消してもらうなんてことはありえないのだ。店の信頼に関わる。

そして、エリザやサラを誘えたことは奇跡だった。もし、彼女らとデート出来なかったなら、カナンはクオンと兄弟ふたりでパレードを観覧しなければならなかったのだ。

カナンの想像するに、それはあまりにぞっとしない絵面だった。
「はつきりくつきりしつかりさっぱりね！」

こんな妙なテンションの弟と二人つきりなど、悪い冗談にもならない。が、そうなる可能性もあったことを考えると、無計画に予約などするべきではないと、いまさらながらに思うカナンであった。

「こんなお店、初めて入りました。なんか緊張しますね！」

と、サラ。そわそわと落ち着きなさげに室内を見回している。さつきまでの清楚なお嬢様のイメージとはかけ離れた、子供のようにきらきらとした瞳だった。

広い一室だ。大人でも十人くらいなら余裕で入ることが出来るだろう。古めかしい調度品の数々は、この部屋に高級感を与えることに成功している。

もっとも、古今東西の古物や雑貨をなんの目的もなく集めた感じもあり、かなり混沌としていた。まるで、興行特区を一部屋にまとめたような、そんな印象すらある。

「趣味は悪いけどな」

天井を翔るかの如く吊るされた龍の彫像と、それを取り巻く小さな天使たちの像を見ながら、カナンは、ぼそとつぶやいた。見るからに高価なその龍の像の手足に囲まれた水晶から、淡い光が降り注いでいる。主張の少ない穏やかな光は、部屋の雰囲気によくあっているだろう。

四人がけのテーブルは、パレードがよく見えるようにという配慮からか、ガラス張りの壁際に配置されていた。テーブルクロスに描

かれた幾何学模様が美しい。料理はまだ前菜も運ばれていないが、すぐに来るだろう。グラスに注がれた水すらも輝いて見えたなら、重症だろうか。

「そう？　結構いいと思うよ」

エリザが、隣のクオンの頬をつつきながら、カナンに言う。どうやらクオンのことを本当に気に入っているらしい。

「異論なし」

幸福そのものの表情を浮かべるクオンが、カナンにはどうも小憎たらしい。

「わたしも、別に悪趣味だとは思いませんが……」

遠慮がちに、サラ。カナンを気遣ったのだろう。その事実が、カナンを余計にへこませた。

「俺はただ天使が嫌いなだけさ」

カナンは、ひとり嘆息した。特に理由があるわけでもない。天使をモチーフとしたものを見ると、無性に壊したくなるのだ。自分でも、その原因がわからなかった。記憶の中の空白部分にその答えが描かれているのかもしれないが、いまはそんなことを考えている場合ではなかった。

「はい」

クオンが返事をしたのは、カナンが沈黙考——というほどのものではないが——している間にドアがノックされたからだろう。ドアが開かれ、黒と白が入り混じったような独特の制服を身に纏ったウェ이터が、テーブルに前菜を並べていく。

その長身のウェ이터と、カナンの目が合った。

カナンの視界が歪む。

世界が軋む音が聞こえた――

「カナン、こんなところで油を売っていたのか……」
(うげ、厄介な奴に見つかった)

目の前にいつものような半眼でこちらを見下すように佇む女を認めて、カナンは、心底嫌そうな顔をして見せた。相手にまったく効果がないことも承知だったが、そんな態度でも取らないことにはやりきれない気がした。

「リリース……」

「なんだ？　また有給休暇でも申請する気か？　そんな人間社会的な権利がおまえにあるわけがないだろう」

あきれ果てた顔で、女。長く流れるような銀髪が目を引き、彼女の特徴はそれだけではない。整った顔立ちは同性さえも惹きつけて止まず、エメラルドグリーンの瞳に見つめられたものは、呼吸することすらままならない。突き出たバスト、ウエストからヒップへ至る美しい曲線は、天に祝福された究極の肢体のひとつなのかもしれない。そのだれもが息を呑むような肢体を出し惜しみするかのように、身に纏う黒装束に隙はない。

リリース「ラグナガーデン。その仰々しい名を、彼女自身気に入ってはいないらしい。」

「そうじゃないさ。ただ、ひとが いい 気 にな って 夢 を 見て た んだ。無理やり起こされれば、誰だって——」

カナンは、リリースと視線を交わすのを嫌って、顔を背けた。暗い室内。様子はわからないが、雨の音が聞こえた。そういえば、嵐が近いという報告を受けていたことを思い出す。

「夢？　おまえが？」

リリースが、嘲笑う。なにもかも知っているような口調だ。いや、実際すべてを知っているのだろう。それがカナンにはやりきれない。「《悪魔》の見る夢など、ただひとつだろう？」

第一夜 夢の都の白昼夢（3）

「カナぴょん！」

クオンの叫ぶような呼びかけに、カナンは、単純に驚いて顔を上げた。どうやらテーブルに突っ伏していたらしい。

周りを見ると、相も変わらず《天の扉》の一室だった。サラが心配そうにこちらを見ていて、クオンはいつの間にか、エリザの膝の上に座っていた。エリザは、どこか恍惚とした表情でクオンの耳たぶを

触っている。

「あれ？」

「「あれ？」じゃないわよ。なんなの？ いったい」

エリザの口調は、カナンに対しては厳しい。サラが、やさしく同調する。

「そうですよ。いきなり眠ってしまったから、どうすればいいものかと……」

困り果てたような表情だった。その仕草のひとつひとつが可憐で、いじらしく感じられる。

カナンがふと見回すと、テーブルの上には前菜は愚か、スープ、魚と肉のメインディッシュにデザートまで取り揃えられていた。そのほとんどが食べ尽されており、葡萄酒の注がれたグラスが所在無げに佇んでいる。もちろん、カナンには料理を口にした記憶もなければ、腹が満たされたという実感もない。

「えーと……これは一体――」

「カナつぴが寝てる間に、ほら」

カナンの間いかけを封じるように、クオンが窓の向こうを指し示した。

晴れ渡った空に泳ぐ雲はまばらで、中天へと上り詰めようとする太陽の輝きは、ひたすらに眩しい。その下に広がる見慣れた町並みから、地鳴りのような喧騒が聞こえてきていた。音楽隊の奏でる旋律と、長大なひとの行列が移動する足音、そして無数の市民をはじめとする見物客のざわめき。

「パレードか！」

カナンは、椅子を倒すほどの勢いで立ち上がって、窓際に向かった。料理のことなどもはや念頭になかった。パレードへの興奮がカナンの全身を駆け巡り、血液を沸騰させ、意識を覚醒させるのだ。背後から、気のない声が聞こえてくる。

「すんごいはしゃぎっぷりねー」

「お祭り騒ぎが三度の飯より好きだから、彼」とは、クオン。

「「彼」って。お兄ちゃんでしょ、クオンの」

「そうだよ。とても大切な、ね」

カナンは、ふたりの会話など気にも留めなかった。体の奥底から湧き出す衝動を抑えられない。

（ん？ ちよつと、待て）

一面の窓ガラスから見下ろす駅前広場は、既にたくさん見物客でこった返していたが、パレードの順路は派手な格好の警備員によって押さえられている。当然だろう。

（俺はなんで、こんなにも興奮しているんだ？）

疑問は浮かぶものの、答えなど出るはずもなかった。改めて考えると、特別祭りが好きでもないし、市民の日のパレードすらちゃんと見た記憶もなかったのだ。

クオンの言う通り、お祭り騒ぎが大好きなら、ガルナバ最大のパレードなていうものを毎年見ていないというのはあまりにもおかし

い。

（あれ……？）

辻褄が合わない。

（いや、そもそも俺は、どうやってサラたちと知り合っただ？）
記憶にないことは、いくら考えたところで解答が見つかるわけがなかった。不安が過る。

そつと、カナンの手にだれかの手が触れた。

「いまはなにも考えなくていいじゃないですか？」

サラが、いつの間にかカナンの隣に立っていた。美しい微笑を浮かべて、カナンの腕に自分の腕を絡ませる。

「さあここにある“夢”の一時、存分に楽しみましょう」

サラの子供を諭すような言い方には、不思議なほど不快感がなかった。素直にうなずく。

「そうだな」

カナンは、駅前の広場に視線を戻していた。いつの間にか、不安も消え失せている。

パレードの先頭が広場に到着したことで、見物客の中から歓声が沸き起こり、五階の室内にまで響いてきた。

「お、ついに来たわね」

窓際にまで来たエリザが、グラスに満たされた葡萄酒を飲み干す。頬がほんのり色づいているのは、飲酒のせいなのだろう。

パレードの先頭の一団は、青を基調とした式典用の甲冑を身につけ、数人ずつの部隊にわかれて、それぞれ異なる武器を持っていた。槍、剣、戟、弓——それらの武器はどれも派手な装飾が施され、実戦では使い物にはならないのは明白だった。

パレードに実戦的な武器を持ち出されても困るが。

「さてさて、今年のパレードのテーマはなんでしょう？」

とは、クオン。窓ガラスに背中を預けるようにして立っている。

「まあ、いきなりですね」

「あー、わたし知ってるからパース」

「テーマ？ テーマねえ」

カナンは、空いている左手で胸元を探った。ガイドブックを取り出すためだ。市民の日のパレードが、毎年異なるテーマで行われていることなど知らなかった。

「カナッペ！ カンニングはダ・メ・ヨ」

「わーったよ！ 考えりゃあいいんだろ、考えりゃ」

ここは素直に従っておくことにして、カナンは、視線を広場に戻した。そもそも、ガイドブックをどこにやったのか思い出せない。サラたちを待っているときの時間潰しに見ていたことは覚えているのだが。

音楽隊の奏でる勇壮な旋律とともに、甲冑の一団と入れ替わるように広場にやってきたのは、あざやかな真紅の一団だった。燃え盛る炎のようなイメージを与える派手な衣装を身に纏い、音楽に合わせて踊りながら行進する。

「あれは戦火ですよ」

サラが、そつとカナンに耳打ちしてきた。彼女の息吹がこそばゆい。

「つまりあれか、戦争か？」

「おいしいけど、それだけじゃ正解はやれないよん」

続くのは、緑色の軍団。青の一団よりも軽装で、派手さにはかけが、動きやすそうな鎧兜を身につけ、装飾の控えめな武器を携えていた。音楽の転調とともに、その手に持った武器を振り回しながら行進する。

闘争へと駆り立てるような、激しく、苛烈な旋律。

「当時、大陸はまさに戦国乱世といった有様でした」

サラの囁きが、カナンの耳に心地よい。

「ミオン、レ・ニ、ウルバーンといった大国をはじめ、ケブル、タイルス、シーファ……数多の国々が大陸の覇権を巡って、闘争に闘争を重ねていました」

再び、転調。

悲しく、重苦しい曲調に合わせて、黒装束の集団が広場へと入ってくる。いままでの軽やかな行進とは異なる、重くひそやかな足取り。観客も息を飲んで成り行きを見守っている。

「長い長い戦乱の時代、国も民もただただ疲弊していきました」

「そりゃあ天にだって祈りたくなるわね」

いつの間にか窓際に来ていたエリザが、クオンを羽交い絞めするようにしながらつぶやく。

「そして」

またしても転調。

重厚にして荘厳な旋律と純白の一団が、さっきまでの暗く重い雰囲気を一掃した。いままでにない歓声が、広場や沿道のそこかしこから上がる。

「天使たちの降臨」

一団が身に纏う純白の装束は、サラの言葉通り、天使を模倣しているのだろう。金色の冠は天使の輪を連想させ、ひらひらと揺れる白のマントは、天使の翼をイメージさせた。

彼らが武器を手にしていないのもまた、伝承による。

「天使たちは、数多の奇跡によって大陸から闘争を一掃しました」戦いにつぐ戦いに疲れきっていたものたちにとって、それはまさに救いだっただろう。

「だれもが——そう、だれもが天使たちを歓迎しました。民だけではなく、王も臣も将も兵も、諸手を上げて天使たちの到来を喜んだのです」

天使の行進に続くのは、さまざまな格好をした一団だった。軽やかで爽やかな音色に合わせて踊るのは、かつての王を始めとする臣下万民だろうか。

王冠を被ったもの、宰相のような格好の男、将官たちに兵士が混じり、数多の民がそれに続く。

観衆が、その列に加わりたそうにうずうずしているのがわかる。ここまで来ると、パレードとしては大成功だろう。

「そうして数多の国々は飲み込まれ、解体され、大いなる名の元に再構築されていったわけだ。人間の時代の終焉って奴だな」

カナンはつぶやきながらも、自分がなにを口走っているのか理解していなかった。

脳裏を駆け巡る文字を言葉にしている、そんな感覚。

「えっ？——」

サラが不思議そうにこちらを見たことで、カナンは、自分を取り戻した。

「気にしないでいいよ。たまにあるんだ、わけわかんないことを口走るときがね」

クオンのそれはフォローと言えるのかどうか。

案の定、エリザが引き気味に言ってきた。

「それってヤバくない？　って言うか、あんた大丈夫？」

「酷いな、さすがに」

カナンは、むっとした表情になったものの、サラの心配そうな視線を感じて、すぐに笑った。

「いや、大丈夫」

それは必ずしも本音ではなかったが、サラの表情を変えることは成功したようだった。

「それならいいんですが」

多少明るい顔で、サラ。

「で、さっきのクイズの答え。わかったよね？」

当然とでも言わんばかりに、クオン。

カナンは、馬鹿にされたような気分になった。

「《戦乱の始まりと終わり、この都市の成り立ち》ってところだろ？」

「もう面倒だから、それでいいや」

「なんだよ、適当だな」

「カナどんには言われたくないね」

クオンが、悪戯っぽく舌を出す。小憎らしくもあり、可愛らしく

もある。この二律背反が、クオンの魅力なのだろう。

「正確には、『戦乱の終わり、天の救い、人の世の幕開け』よ」
珍しく真面目な口調で、エリザ。

（なに言ってるんだか。人の世は終わってしまったんだよ）

失われた時代を哀れむ必要はない。ただ、事実を忘れてはならないのだ。

人々は天使の到来を待ち望んでいたが、さて天使たちはどうだろう。彼らには、人の世を存続させる理由はない。

（ん？……なんの話だ？）

カナンは、自分で考えたこともわからず、もどかしさで苦しくなった。

「エリザのお父さんが関わってるんですよ。今年のパレード」

「へー、凄いや！」

「去年も一昨年もよ。市のお祭り担当だからね、パパの部署」

照れ臭そうでいてどこか誇らしげに、エリザ。実際、嬉しいのだろう。親の仕事が、これほど多くの観衆を沸かせているのだから。

「さて、お次は？」

カナンは、いちゃつきはじめたクオンとエリザから視線を外し、広場を見やった。

長い長い臣下万民の行列のあとに控えていたのは、またしても天使たちの行進であった。ただし、今度は白一色ではない。

色とりどりの衣装を纏った天使たちが、背後に光の輪を浮かべて、あるものは空中を舞い、あるものは地上を滑るように移動する——そのパフォーマンスは想像を絶し、驚きのあまり観衆のだれもが息を飲んで見入っていた。

「凄い凄い凄い凄い！」

人間が、なんの仕掛けもなく空中を散歩するかのように浮かんでいるのだ。感動しないほうが、どうかしているのだろう。

「ほんとに……！」

「信じられないわね……！」

サラもエリザも、興奮して眼を丸くしていた。

カナンだけが、極めて冷静だった。いや、そうだったのは天使たちの飛行を見た瞬間だった。それまではのほほんとしていたはずなのだが。

意識が急激に冴えていき、ある種感覚が鋭敏に研ぎ澄まされていった。視野が拡張し、今まで見えなかったものすらも認識できるような錯覚すら覚える。

カナンは、己の両目に強い力が集まっているのを感じた。淡い青さを湛えていたはずの瞳は、いまや金色の輝きを帯びていた。その視線の先には、天使たちの光輪。光の輪は、発光するなにかが高速で回転していることで、輪のように見えているのがわかった。

「エンジェル・リングの展開を認識——高速詠唱術式の解析——重力の中和、及び空中での姿勢制御——即ち《飛行》」

カナンは、自分でもなにを言っているのか理解できなかった。さつき以上の混乱が、頭の中に押し寄せてくる。

「《天使》——二百——《大天使》——二十——《權天使》——二——大した兵力じゃない。《能天使》も《力天使》もないのだ。これならリリスに応援を請うこともないだろう。」

（なんだ？ リリス？ だれだ？）

カナンの混乱はひどくなる一方だった。謎の言葉が謎の言葉呼び出し、そこへさらなる謎が連なって、がんじがらめになっていく。

第一夜 夢の都の白昼夢（4）

悪い夢だ。

悪い夢に違いない。

不意に、広場から盛大な歓声と拍手が怒濤のように聞こえてきた。ついに広場に市長が姿を見せたのだらう。天使たちの飛行に茫然としていた観衆が、一斉に動き出していた。歓喜に満ちたざわめき。不自然なまでに統一された反応。

市長は、天使たちの牽く、仰々しくもきらびやかに飾り立てられた乗り物に乗っていた。乗り物の高さは、軽く五メートル以上はあった。遠くの観衆にも市長の姿がよく見えるようにだらうか。あるいは、市長の眼により多くの市民の姿が映るように、という配慮かもしれない。

市長は、見た目には初老の男だった。見事な白髪は今までの激務の代償か、賜物か。しかし、顔つきや肌の張りは、とても六十代には見えないほど若々しい。白のスーツは天使たちの衣装に合わせたのかも知れない。がっしりと引き締まった肉体やしっかりした足腰は、年齢による衰えを感じさせなかった。

カナンには、市長の目の緑の虹彩まではつきりと見えた。

天使たちが、市長や観衆の頭上を旋回しながら、どこからか取り出したラッパを弾き鳴らし、または手にした籠から無数の花卉を撒き散らしていく。

ふたたび、歓声が上がった。

幻想的な情景。

夢のような光景。

夢――。

「そう、夢さ」

カナンは、自分の意識が鮮明になっていくのを認めた。頭の中で攪拌していた数多の雑念が消え失せる。頭痛が消えたような爽快感。

「お集まりになった商業区の皆さん、あるいはほかの地区から来られた皆さん、観光で来られた方々、盛大なお出迎え誠にありがとうございます」

広場では、市長の演説とも思えない演説が始まっていた。そもそも演説でもないのかもしれない。

「本日、十月三日は市民の日——このガルナバの誕生日であります」
カナンは、市長の瑞々しさに溢れた声音を聞き流しながら、そつと、サラの手を離れた。彼女の驚いた顔に苦笑する。

その反応が、あまりにも仰々しかったからだ。

「驚くほどのことかい？」

カナンはつぶやいて、右手を窓ガラスに押し当てた。

「いまさら、さ」

しかし、サラが驚くのも無理はないだろう。カナンの背後に、天使たちと同様に光の輪が浮かんでいるのだ。美しく発光する輪。

エンジェル・リング。

「機関開放——展開確認——術式認証——完了——神秘言語の高速詠唱開始——」

カナンのエンジェル・リングが、目にも止まらぬ速度で回転する。いや、エンジェル・リングは常に回転しているのだ。ただ、速度を上げただけに過ぎない。

「衝撃よ」

「カナンいけないっ！」

焦ったようなクオンの叫びは、カナンの右手の先に生じた衝撃波が窓ガラスを粉碎したときに生まれた破壊音にかき消された。

けたたましい破砕音とともに無数のガラス片が、広場へと降り注ぐ。

悲鳴が上がった。サラか、エリザか、観衆か。

もはやカナンにそんなことを考える余裕はない。窓の外へ飛び出す。エンジェル・リングは、カナンの思うがままに術式を組み上げ、高速詠唱を続ける。

重力の中和、及び空中での姿勢制御、推進力の強化——即ち《飛翔》。

「翼よ」

神秘的な光が、翼のようにカナンの背中に展開し、高速飛行を助長する。

無数の視線が、一斉に自分に集中するのを認識して、カナンは、軽く笑ってしまった。

「やりすぎたかな」

自嘲しながらも、天使たちが戦闘態勢に入るのは見逃さない。といて、どうこうすることもなく、カナンは、ひたすらに市長を指す。

空中を飛ぶのは久しぶりだったが、エンジェル・リングの卒のな補助のおかげで、落下することもない。もつとも、重力を中和しておいて落下するなど、よほどのことがない限りありえないのだが。例えば、敵に打ち落とされたりでもない限りは。

「尻尾を出すのが早すぎではないか？ 少年」

動じることもなく話しかけてきた市長の声は、はっきりと聞こえた。

突然の乱入者のおかげで、恐慌状態に陥った観衆の巻き起こす悲鳴の嵐の真っ只中でも、はっきりと、鮮明に。

カナンは、我知らず叫んでいた。

「ドミニオン・ラザクル！」

カナンから市長までの距離は約五メートルといったところだった。カナンの全周囲に展開する二百あまりの天使と、二十の大天使、ふたりの権天使が、カナンに向けて腕をかざしていた。それぞれの手の先に小型のエンジェル・リングが展開する。

それは無数の砲口を向けられているようなものだった。

「わたしはラザード。夢の国ガルナバの市長ラザードだよ」

市長が、掲げていた右手を下ろす。

それが号令だった。一斉に天使たちがなにかを口走る。術式化し

た神秘言語を確定する言葉。魔法を発動するための結語。呪文の末尾——天使たちの光輪から、数え切れない量の光線が轟然と迸る。
「そつかよ！」

さまざまな軌道を描いて自分に殺到する魔法の嵐に対して、カナンは、瞬時に魔法による強力な防壁を張り巡らせた。幾重にも展開する光の壁がカナンを包みこむのとはほぼ同時だった。

数多の魔法の着弾により、凄まじい衝撃と爆音の連鎖がクオンを襲った。痛みはない。魔法の発動がなんとか間に合ったおかげで、カナンは傷ひとつすら負わなかった。

「いつまでそうしてられるかな？ 少年——いや、《悪魔》よ」
濛々と立ち込める爆煙の中で、市長の声だけが浮いている、そんな感覚がある。彼だけが、この戦闘に直接与していないからだろう。黒煙が流れていく。

「！」

カナンが目を疑ったのは、ついさっきまで逃げ惑っていたはずの観衆たちが、こちらを見上げていたからだ。その無数の瞳が、淡い光を発しているように見えた。

純粹な輝き。

そして、エンジェル・リングの展開を認識する。その数、優に一万を超す——

「いつか君が来るであろうことは理解していたよ。そして、先ほどリリース「ラグナガーデン」を認識した。リリースがいるということは、君もいるはずだろう？」

悠々とした調子で、市長。

「ちっ、あの女！」

カナンは舌打ちした。上から見下すだけ見下しておいて、ろくな仕事をしないのはどういう見なのだろう。今度あったら愚痴の一つや二つ、あるいは百や千くらいは叩きつけてもいいだろう。

無論そんな嫌味など、リリースには、まったく完全にこれっぽっちも届かないのだろうが。

「《悪魔》よ。ただひとり、《天帝》に支配されざるものよ。背約者。呪われし竜よ。裁断者よ」

市長の芝居がかった台詞回しに辟易しながらも、カナンは、防壁を築いたまま動けずにいた。一万を越す大群に包囲されては、さすがのカナンもうかつには動けなかった。

市長が、カナンにその手を差し伸べるようにする。

「わたしとともに夢を語らないか？ 永遠に続く夢物語を」

カナンは、笑うしかなかった。この状況で差し出された言葉のあまりの馬鹿馬鹿しさに。あまりのくだらなさに。

「ふざけるな」

カナンは、一蹴して、防壁を解除した。全速力で、市長に襲い掛かるのだ。

「残念だよ」

市長が指を鳴らす。

その場にいたすべての天使の輪が咆哮したように、カナンには思えた。

極彩色の光の乱舞が、カナンの意識を塗り潰した。

第二夜 夢に遊べと病は誘う（1）

カナンは、どこまでも続く回廊を歩いていた。

金剛石で構築された廊下。

天井に灯るのは、太陽の如き黄金の輝き。

道は遙か前方まで続いていて、ゴールなど見えやしない。

いつから歩いているのだろう。

いつまで歩けばいいのだろう。

どこから歩いているのだろう。

どこまで歩けばいいのだろう。

そもそも、ここはどこなのか。

そして自分は一体なにものなのか。

疑問が、次々と頭の中に沸いては消えた。余韻すら残らない。

「おお、《悪魔》よ」

唐突に、頭上から声が聞こえた。なにものにも変えがたいほど偉大で、至高の光輝を放ち、圧倒的な叡智を窺わせる声音。

「なぜ、おまえは堕ちたのだ」

声は、懊悩に満ちていた。いつもは雄大で、その声を聞くだけでだれもが魂を震わせ、恐れ戦くというのに。

「なぜ、わたしの傍らで夢を語ってくれない？」

カナンは、さすがに笑わざるを得なかった。

「夢を見てしまったからさ」

それは間違いない答えであり、だれもそれを否定することはできないはずだった。そして、だれもその解答を覆したりはしないだろう。それはこの世の原理を覆すことに他ならない。

もつとも、彼にはそれでは不服なのかもしれない。彼のそういうわがままなところは、嫌いではなかった。

しかし、もはやどうしようもないことだ。決断は翻せないし、起きてしまったことを元に戻すことは出来ない。

時間は進んでいく。

（そう。止まってもいけない）

カナンは、先を急いだ。

ただ前進しなければならぬ——そんな強迫観念が彼を突き動かしていた。

「？」

ふと気付くと、目の前には金剛石の回廊ではなく、黒曜石の街が広がっていた。

家屋も道路も街灯は愚か、街路樹や草花に至るまで、黒曜石で作られた街。

空気が重い。湿気を帯びているのだろう。雨が近いのかもしれない。

雲に覆われた空が、黒曜石で埋め尽くされた天蓋に見えた。

長い長い大通りの中程、大きく開けた十字路に、ひとりの少年が佇んでいた。真っ赤なレインコートが、漆黒の風景に異様な変化をもたらしている。

女性的な作りの少年の顔には、見覚えがあった。まったくもって思い出せやしないのだが。

齒痒さはない。

なんだって、いつかは忘れていくのだ。なにかもすべてを記憶できるほど、人間の記憶容量は大きくない。

「君は人間じゃないよ」

少年が可笑しそうに言ってきたのを、カナンは、優しく受け止めた。

なぜだろう。

愛しさが溢れた。

「知ってるよ」

「そっか。なら、いいや」

満足そうな笑顔を浮かべて、少年はレインコートのフードを被った。その炎のような赤は、またすぐに灰を被って黒く染まるのだろう。

う。

それは、少し残念なことだった。

「嵐が来るよ。気をつけて」

少年の姿が、カナンの視界から消えた。

「ありがとう」

そんなカナンの声は、突然の暴風に吹き飛ばされた。

カナンもろとも。

「マジかよ!？」

少年の忠告を信じなかったわけではない。ただ、嵐が来るのがあまりにも早すぎた。

凄まじい強風に拐われながら、カナンはしかし、まったく不安を抱かなかった。

空へ。

分厚い鉛色の雲が幾重にも折り重なるその中を、強烈な旋風に導かれるように上昇していく。

全身がびしょ濡れになって、凍てつくほどに冷え切っていくが、どうすることもできない。

雲海を抜けると、透き通った蒼穹に辿り着く。

さらに遙かな高みに悠然と浮かぶ太陽が、その金色の美貌を惜しげもなく披露していた。

その膨大な日輪の輝きを浴びて、足元の雲海があざやかにきらめいていた。

いつか見た景色。

あまりにも懐かしくて、カナンは、涙をこぼしそうな自分に驚いた。

（まだ、忘れられないのか？）

そして、己の身体に変化が起きていることを知る。

すらりと伸びた手足は光沢を放ち、欠点ひとつない肢体には眩いばかりの純白の衣を纏う。燃えるような金髪と、黄金の瞳は太陽を双眸に封じ込めたようだ。

背には六対——十二枚の翼があつた。二枚が顔を隠し、両肩から胸元を覆う二枚、別の二枚が腰回りを隠し、さらに二枚が足を隠していた。残りの四枚の翼が、彼の天翔る翼であつた。

翼は、その羽一枚一枚が鮮烈な光を発しており、無数の翼を纏う彼は、それ自体がもうひとつの太陽のようですらあつた。

そして、背後には九重の光輪が展開しており、攻撃のための神秘言語が高速で詠唱されていた。魔法を放つために。

（そうか）

カナンは、これから起こることを理解して、苦笑した。いまさらこんな夢を見せて、なんになるというのだろう。

つぎの瞬間、天地が晦冥したかと思われるような激変が、カナンを襲つた。

太陽が影に覆われ、蒼天が暗黒に染まつた。

星ひとつ見えぬ無明の闇が世界を包み込み、その暗黒の空を無数の光が閃いて切り裂いた。数多の雷鳴の合唱が天地に轟き、見えざるものたちによる破滅的な戦いの余波が、世界を成立させる法則すらも歪めていく。

一筋の雷が、カナンを撃ち落す。

絶対的な敗北感の中で、しかし、彼は、すべてから解放されていく自分を認めていた。

雷光に焼かれた翼が、黒く焦げて醜く変貌していく。輝いていた髪は愚か、眩い肢体も醜悪な変化を遂げていく。

数多の翼を持つ竜へと。

そして再び、雲海の中へ。

数え切れない天使たちと遭遇した。

だれもが目をあわず、ただ呪いの言葉を浴びせてくるだけだつた。いまは、武器や魔法よりも呪詛のほうが効果的だと知っているのだろう。

変貌が加速する。

雲の海を抜けた。

戦火に包まれた大陸が見えた。

白銀の城塞があった。赤銅の歩兵と青銅の騎士の死闘が、落日をあざやかに彩った。

黄砂舞う都市があった。深紅の踊り子たちと群青の詩人の一夜の戯れが、都市の終焉を飾った。

緑に覆われた村があった。純白の巫女と漆黒の鬼の婚姻が、小さな村の破滅を約束した。

いくつもの滅びを見る一方で、新たな国の誕生もある。

しかし、それもまた、新たな火種に過ぎない。

戦火が戦火を呼び、闘争が闘争を引き寄せる。血で血を洗う戦争。死を死で贖う戦闘。数多の激闘、無数の死闘。

ここは火薬庫なのだろうか。

カナンはしかし、歓喜に満ち溢れていた。

蔓延する絶望の中で、それでも歩みを止めない人々が見えた。希望を胸に、夢を掲げるひとびとの表情は実に心地よかった。

堕ちよう。

この火薬の庭の中心へ。

「やあ、遅かったね」

声は、頭上から聞こえた。

カナンは、いつの間にか地面に仰向けに倒れていて、いまにも降り出しそうな空を見ていた。極めて新鮮な気分だった。体中の老廃物は愚か、不要なものをすべてを吐き出して、内臓だけではなく魂までも洗浄したような感覚。

カナンが、声の方向に視線をやると、黒いレインコートの少年が立っていた。

「ぼくはクオン。クオン＝ション」

少年が差し伸べてきた手を、カナンは、なんのためらいもなく掴むと、ゆっくりと身体を起こした。肉体を動かすという感覚が不思議だった。

「君は？」

少年が、知っているはずのことを尋ねてきたけれど、カナンは、嫌な顔ひとつ見せなかった。

これは儀式だ。

「俺はカナン」

もう一度、産声を上げるための――

「カナっち！」

大音声が聞こえて、

「！」

カナンは、瞼を開くなり、すぐ目の前にくりつとした可愛らしい瞳があることに驚いて、叫びかけた。

「ガツコに遅れるよ」

声が出せなかったのは、クオンの細くしなやかな指先が、カナンの口を塞いでいたからだ。

悪戯っぽい瞳が美しく輝き、口紅でも塗ったかのように紅い唇が、笑う。濡れた長い髪から滴る雫が冷たい。

カナンは、クオンの手首を掴んで自分の口元から引き剥がすと、無言のまま視線を巡らせた。

ふたりで借りているアパートの一室。散らかし放題になった部屋は、まるで腕の悪い盗賊にでも荒らされた跡のように見えた。

散乱しているのは、主に書物だ。開きっぱなしになった古めかしい本のページが、窓から入り込む風によって捲られる音は、カナンの耳に心地いい。

真っ白な壁が四方を囲い、小さな窓には空色のカーテンが揺れていた。天井から吊るされた旧式の水晶灯は、いまにも落ちてきそうだった。

「なにやってんだよ」

カナンは、半眼で弟を見た。カナンは、部屋の真ん中に配置されたベッドの上、水玉模様の寝間着を身につけて、仰向けに寝ていたのだが。

「夜這い」

悪びれもせずに、クオン。半裸の少年は、カナンの上に馬乗りになっっていた。朝っぱらからシャワーでも浴びてきたのだろう。洗い立ての髪の毛の匂いが、カナンの嗅覚を刺激した。

「朝だろ！」

「そだけど？」

「夜這いは夜にするもんだ」

カナンは、近すぎるクオンの顔を引き離すつもりで、その額を軽く小突いた。

「じゃあ、朝這い」

とんでもなくいい考えでも思いついたような、あるいは世紀の発見でもしたような弟の顔が馬鹿馬鹿しいくらいに愛らしくて、カナンは、軽くため息をついた。クオンには、あらゆる意味で勝てそうにない。

「さつさと服を着なさい。風邪を引いても知りませんよ」

クオンの華奢な肢体を押し退けながら、カナンは、極めて他人行儀に忠告した。ベッドから降りて、散らかし放題の部屋で着替えを探す。

「いや〜ん、怒らないで〜」

クオンの甘えたような声は、さすがに気持ち悪いとカナンは思った。

第二夜 夢に遊べと病は誘う(2)

ガルナバは、夢の都と謳われる。

夢を叶えるために集まった多くの人々が己の理想を実現してきたからであり、その事実が大陸各地に伝播して、さらに多くの人たちが眩い幻想を胸に抱いて、この都市に訪れるからだという。

工業区では、技術者たちの夢の結晶として最先端の技術が産声を上げ、商業区では、毎日毎日新たな商品が開発されたり商売が生まれては競争が起こり、興行特区では、夢の都の代名詞として、連日連夜のお祭り騒ぎを催している。

では、学業区はどうなのか。

カナンの視界を見慣れた町並みが流れていく。

潔癖なまでに秩序的に整理された町並みは、この区画を設計した人物の性格によるものなのか、はたまた当初の計画通りなのか、そんなどうでもいい疑問にばかり気を取られる。

舗装された道路にはごみひとつ見当たらず、等間隔に立ち並ぶ街路樹はいつも春めいた色彩を帯びていた。

もう十月だというのに、この季節感の無さが実にガルナバらしいと言える。

道路脇に立つ街灯は、少女形の天使が小さな水晶灯を胸元に抱き締めている、というデザインだった。

確か数年前の芸術祭で最優秀デザイン賞をとった作品で、学業区以外にもいくつか設置されている。

「なんでぼくが漕がなきゃならんのだ〜!」

カナンは、自転車の後部座席(荷台にマットをくりつけたただけだが)に悠然と腰を下ろしたまま、クオンの悲鳴を聞いていた。

頭上には雲ひとつない青空が広がり、燦々たる太陽光が寝起きの頭を覚醒させていく。

カナンは、弟の小さな肩を掴みながら、つぶやくように言った。

「全部おまえが悪い」

「なんでさ！」

クオンが、噛みついてくるのは予想通りだった。

「おまえのせいで！ 夢の内容も！ 昨日の勉強の成果も！ 全部なくしちまったんだよ俺は！」

大声で捲し立てながら、カナンは、なぜここまで本気になる必要があるのか自分でもわからなかった。

「そんなこと自慢するかなあ、ふっ」

「自慢なんかしてねー」

呆れ果てた弟の態度に、カナンは、むっと顔をしかめるのだった。二人乗りの自転車が向かうのは、カナンとクオンが通う学校である。そしてふたりは、同じ制服を身に纏っていた。

黒を基調としたブレザーで、背中に天使の翼をモチーフにした模様があつた。その意匠は有名なデザイナーの手によるもので、女性にはその可愛らしいデザインが人気だった。

学業区は、その名のままに学業のための教育機関が無数に存在し、常に競い合つて切磋琢磨していた。

ふたりの通う学校は、学業区五番街にあり、彼らのアパートからは自転車で飛ばして約十分といったところにあつた。

聖クラウディア学園。いわゆる高等教育の施設——ハイスクールであり、本来ならクオンほどの年齢の学生が通学するべき学校ではなかった。

が、神童、天才児といった異名を欲しいままにする彼にとっては、飛び級など造作もないことだった。

本気になれば大学にだって行けるのに、カナンと同じ学校に通っているのは、

「カナちゃんのいない学校なんて退屈でつまらないもん」

そんないじらしい理由ではあつたが。

歩道を進む学生の群れに見知った顔を見つけて、カナンは、クオンの耳元で呪文でも唱えるかのように囁いた。

「体力の確保、及び速度の低下——即ち、徐行」

「なんか変な言い方〜っていうか、それじゃ意味が伝わらん！」

クオンは、口を尖らせたものの、カナンの言わんとしていることは理解したのだろう。自転車の速度を緩めて、歩道に近づける。

同じ学校に通う女生徒の何人かが、クオンに手を振った。

クオンが、美少女のような微笑でそれに答える。実際、長すぎる髪をポニーテールにしているのだ。男装した少女に見えてもおかしくはなかった。

「おまえの人気なんて、別にうらやましくないんだぞ」

負け惜しみのような言葉を残して、カナンは、自転車の荷台から飛び降りた。目の前に、サラ・ブレッドのちよつと驚いたような顔があった。

「別に勝ち誇つてもないけどね〜」

「わーってるよ」

背後からの気のない言葉に返答しながら、カナンは、サラに微笑んで見せた。

「おはよ」

「おはようございます、カナンさん」

サラも笑顔で挨拶してくる。栗色の髪の毛が、朝日の中できらきらと輝いていた。彼女には、ブレザーの天使の羽がよく似合う。やや短めのスカートから伸びた太ももが、やけに眩しい。

「今日もおふたりで。兄弟仲がいいんですね」

「そりゃあ兄弟だからな」

答えながら、カナンは、微妙な違和感を覚えていた。

兄弟？

だれとだれが？

（俺は天涯孤独だろう？）

脳内の小波は、次の瞬間に掻き消えた。明るい衝撃があったからだ。

「よっす！」

「痛っ！」

エリザ・ベスの威勢のいい挨拶が聞こえたかと思ったら、カナンは、背中を思い切り叩かれていた。ひどい力だった。

危うく涙がこぼれるくらいの痛みに、カナンは、頬を膨らませて後ろを見た。

「やあ、兄貴、元気ないわね」

クオンの自転車の後ろに我が物顔で腰掛けたエリザが、カナンにひらひらと手を振ってくる。金髪があざやかだ。

彼女がカナンのことを兄貴などと呼ぶようになったのは、ついこの間からだ。

「今朝からあんな調子なんだ」

「もしかして低血圧？」

「そうなのかも」

「学校行くより病院いったほうがいいんじゃないの？ 最近の兄貴、言動がいろいろとヤバめだし」

「なんか違うよ、それ」

「あはは、そうかなあ」

朝からテンションの高すぎるエリザとクオンについていけず、カナンは、空を仰いで嘆息した。頭を抱えたい気分だった。

「明日病院行ってくる」

カナンは適当につぶやくと、サラに向き直った。あのふたりの相手をするのは疲れるし、なにより時間を食ってしまう。くだらないやり取りをしている間に遅刻するのは、笑い話にもならない。

それもいいかもしれないが。

「行きますか？」

「うん」

サラにはついつい素直にうなずいてしまうのは、カナンが彼女に惚れているからなのだろうか。

ふたりは歩き出して、歩調は学生たちの通学の波に身を任せるようにした。

「じゃあお先」

と、クオン。自転車を漕ぐ彼の表情は、幸福そのものだった。

「サラも頑張つてね〜!」

クオンの腰に腕を回してしっかりと抱きついたエリザは、その短いスカートからすらりと伸びる美脚を見せ付けるようにした。見せ付けているのは、それだけではなかったが。

多くの学生たちが、男女関係なく、自転車で疾走するふたりをうらやましそうに見ていた。口笛を鳴らすものまでいた。

「いいのか？ あれ」

「なにがですか？」

きょとんと、サラ。

「エリザの奴、あれでもモデルなんだろう？」

「あれでも……って、失礼だと思います」

「すまん」

カナンは、即座に謝った。口論するつもりはないのだ。

実際、エリザは、学業の傍らプロのモデルとして活躍しており、その美貌とスタイル、着こなしの素晴らしさから十代の女性を中心に人気があつた。学園内にも彼女のファンクラブが存在しており、クオンはなぜかその名誉会長になっていた。

「いいんじゃないですか。本人が幸せなら」

サラは、微笑んでいた。親友のエリザが楽しそうにしているのを見るのが好きなのだと、以前彼女が言っていたことを、カナンは思い出した。

「そうかねえ」

「だいたい、言つて聞くような素直な性格してませんし」

「案外毒舌だな」

カナンは、あさつての方向にぼそつとつぶやいた。サラのにこやかな声が聞こえてくる。

「なにか言いました？」

その声音の奥に潜むどす黒いなにかを感じて、カナンはかぶりを

振った。そんなところも嫌いではないが。

「いやなにも。そういや、エリザの親父さん、今年のパレードに関わってたんだっけ？」

「総合演出という話を聞きましたけど」

「凄かったなあ、あのパレード」

カナンの脳裏には、どこかの広場を行進する極彩色の一団があった。どこで見たのかは思い出せないが、確かに見た記憶がある。その場には、クオンはおるか、サラもエリザもいたはずだ。

「はい？」

「テーマは《戦乱の終わり、天の救い、人の世の幕開け》だっけ。あんな演出が出来るなんて、ほんと凄いよ」

カナンは、ただただ感嘆するだけだった。美しい舞でも踊るかのよう、空中を飛び回る天使たち。その天使に引かれて進むのは、飾り立てられた乗り物。乗り物の上で演説する市長ラザード。

ふと、サラが足を止めた。

「カナンさん、さっきからなんの話をされているんですか？」

サラが、困惑したようにたずねてくる。

彼女の表情に、カナンこそ戸惑った。

「なんの話って、パレードだよ。市民の日のパレード」

カナンは、強い口調で言った。その場には間違いなくサラもいたはずなのだ。

「市民の日は明日ですよ？ 今日十月二日です」

サラの唇が動いたのに、カナンは、周囲の音が遠のいていくような気がした。

「え？」

雨音が聞こえた。

嵐が近い。

第二夜 夢に遊べと病は誘う(3)

「夢か……？」

ささやかに覚醒していく意識の中で、カナンは、ずぶ濡れの自分の有り様を認めた。身に纏う黒衣はずたばろで、血と雨と泥で汚れきっている。

どこかの路地裏。

降り続ける雨が、傷だらけの体に染み入って、痛みの連鎖を呼ぶ。空を仰ぐ。

半球形の天蓋が遥か頭上を覆い、外界とは隔絶されているはずで、雨の入り込む余地などはないのだが。

都市内の天候を管理しているシステムにトラブルでもあったのだろう。その上、それを修理することもなく放置しているのだ。

そして、システムの誤作動によって、嵐が発生しようとしている

「ちっ……どうなってるんだ」

体を気遣いもせず立ち上がって、カナンは、吐き捨てるようにつぶやいた。周囲を見ても、高層建築物に囲まれた路地裏からは、特に何も見出せない。

「ここは……ガルナバだな」

ガルナバ。

ドミニオン・ラザクルによって管理されるこの都市は、一時期、

《夢の国》として大陸全土を席卷した。

ガルナバに行けば、夢が叶う。

ガルナバに行けば、理想を実現できる。

ガルナバに行けば、なにもかもすべてが手に入る。

そんなくだらない噂とも妄想ともつかない流言が大陸中を駆け回ったのは、人間が、この天使たちの築いた樂園に多少なりとも閉塞感を抱いていた証かも知れない。

もつとも、そのころにはまだ、仮初にも自由というものがあつた。《封印都市》間の交流は盛んに行われ、観光旅行だつて簡単に許されたし、移住にも寛容だつた。

大陸各地の《封印都市》のさまざまな噂や情報が錯綜し、ひとびとは、自分の好みに合った《封印都市》を探して、大陸中を走り回つた。

懐かしい時代。

「さて」

カナンは、頭の中で展開していた昔話を終わらせると、ゆっくりと背を伸ばした。雨の中、傷だらけで半裸に近い格好で寝ていたためか、全身がそこはかとなく痛い上に冷たい。

このままでは風邪を引くどころか、もっと重大な欠陥を抱きかねない。

カナンの背部に三重のエンジェル・リングが発生し、静かに神秘的言語を詠唱し始めた。

「大いなる御手よ」

カナンがつぶやいたのは、呪文の末尾。エンジェル・リングが組み上げ、読み上げた術式を確定する結語。

それによつて、神の法理に支配された世界に現出するのは、魔の法理。

光が、カナンを包み込んだ。穏やかで優しい輝きだつた。

その光は、肉体の損傷を復元し、失われた血液を補完する力を持っていた。肉体の外面のみならず、内臓をも点検し、必要とあらば治療していく。

《完治》の魔法は、その名の通り、対象の生体をほぼ完全に治療するためのものであり、その所要時間は極めて長く、普通はそう容易

く使わない類の魔法だった。

しかし、いまのカナンには、どうしても《完治》の魔法が必要な気がした。全身の毒素を除くだけではない。精神領域に入り込んでいるノイズを消去したかった。

夢を長々と見すぎた。

現実と虚構が混線し、頭が回らなくなってきた。

「それにしても、俺はどうしてこんなところに？」

そして、なにゆえ傷だらけだったのだろう。

確かに、夢の中では天使の大群と戦い、あっけなく撃ち落されたが。

「夢が現実になったのか？」

それはあまりにもつまらない冗談だが、無い、と言い切れない部分もあった。

《封印都市》においてドミニオンの力は、時として極めて万能に近くなる。

カナンは首を振ると、路地裏から大きな通りに出た。

雨は降り続けている。

「むう、傘が欲しい」

カナンは小さくうめいて、周囲を見た。なんのことはない。どこにでもある、近代的な大都市の姿が遠くまで広がっていた。

立ち並ぶ数多のビルは、ドーム状の天井には決して届かないように設計されているのは当然だろう。普通ならば自動車が行き交っているはずの道路の幅は、狭い。

無人の街。

喫茶店やレストランの看板もなく、カジュアルにしろフォーマルにしろ、衣類を扱う店の姿もなかった。当然、食料品や日用品を取り扱っているような店もない。

信号機だけが、音もなく明滅している。

カナンは、すぐ近くのビルの正面玄関まで小走りで駆けつけた。ビルの出っ張った屋根が、天梅雨をしのぐのに最適だった。

「リリスは無事かな」

とは言ったものの、カナンは、別に心配などしていなかった。無事だろう。

心配するだけ時間の無駄だ。

適当に切り上げて、カナンは、これからの行動方針を考え出した。
と――

「いつやあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああ――」

それはまるで、怪鳥の鳴き声のようなものだった。

《封印都市》の静寂をぶち壊し、破滅的な騒音を引き連れながら、それは、落ちてきた。

カナンの目の前、だれもない道路の真ん中に。

路面に激突し、なぜか爆風が起きて、カナンの身体を揺らした。

アスファルトの上に無残な格好を晒したそれは、リリスだった。

銀髪が全身を覆うほど長く、身につけた黒装束の上からでもはつきりとわかるほどに主張の激しい肢体を誇る、女。

間違いなく、完全無欠に、どうしようもないくらいに、リリス

ラグナガーデンだった。

「ふっ……くくく」

なぜか不敵に笑いながら、リリスが、顔面を路面から引き剥がすように上体を反らした。銀髪が広がり、無数の雫が舞う。手前のアスファルトは、リリスの美貌をかたどったように陥没しているが、彼女の顔には傷ひとつなかった。

「胸がなければ即死だったな」

リリスが、勝ち誇ったようにつぶやく。ちょうど、美しく隆起したバスとが強調される体勢だった。

カナンは、リリスが立ち上がるのを待ってから、告げた。

「いや、胸があるうとなかろうと死んでるだろ、普通」

一拍の間があった。ちゃんと聞こえていなかったのかも知れない。
「？」

リリスが、視線をさまよわせ、やがてカナンと目が合う。エメラルドグリーンの虹彩に、驚きが生まれる。

「なっ！？ カナン！？ 見ていたのか！？」

慌てたためくリリスの様子は、あまりにも現実離れして見えて、カナンは、これこそが夢なのではないかと疑いかけた。冷やかに言う。

「なにを取り乱してるんだ」

リリスは、不意に頭上を仰ぐと、しばらく沈黙した。

「ふっ……危うくわたしのクールなイメージが崩れるところだったな」

雨の中でなぜか勝ち誇る女の姿に、異形の化け物を幻視したような気分になって、カナンは軽く眩暈を覚えた。

「おまえの性格が俺にはわからん」

「で、なんでまた落ちてきたんだ？」

カナンは、特に考えもなくリリスに訊ねた。ふたりとも、ビルの玄関先で雨宿りをしていた。

カナンを包み込んでいた魔法の光は既に失せている。魔法による治癒が終わったのだ。肉体の状態は良好。精神面でも不安はなかった。

ぼろぼろだった衣服すらも、魔法によって完璧に復元されていた。雨音の不規則な旋律が、都市の静寂を一層際立たせている。

「知りたいのか？」

ハンドタオルで濡れた髪を拭いながら、リリス。どこから取り出したのか。ハンドタオルには、間抜けな熊のキャラクターがプリントされていた。

「いや全然」

透かさずかぶりを振って、カナンは、雨音が少しずつ早くなってきたことに気づいた。報告通りならば、この広大な閉鎖空間に嵐が吹き荒れることになる。

そうなれば、ドミニオンの追及どころではなくなってしまうだろう。

「おまえがどうしてもというのなら教えてやらんこともないが」

リリスのうんざりするような言い回しに、カナンは、そっと告げた。

「だから別に聞きたくねーっす」

カナンは、なぜか硬直したリリスの脇をすり抜け、屋根の外に出た。感覚が、なにかの接近を捉えていた。

降り止まぬ雨の中へ。背後から、リリスの声が聞こえた。

「撃ち落されたのだ。あの力天使どもに」

カナンが頭上に目を向けると、女性形の天使がふたり、こちらに向かってゆつくりと降下してくるところだった。

天使たちは、淡く発光する純白の衣を身に纏い、背部に光輪を展開している。そして、目元を漆黒の帯で覆い隠していた。

力天使。ドミニオン支配下の最高戦力である。

「今回はえらくあっさりと折れたな」

カナンは、エンジェル・リングを起動すると、相手の出方を想定して術式を構成していく。もっとも、それを実行するのはエンジェル・リングだ。

カナンの頭の中で描かれた魔法のイメージが、エンジェル・リングによって神秘言語へと変換され、望みを実現するための術式を構築していく。

そして、エンジェル・リングは、歌い始める。

魔法の意味を。

「わたしだって学習している！」

叫ぶように、リリス。見ると彼女は、光輪を展開することなく、いつの間にか手にしていた長刀の重さを確かめるように振り回して

いた。ガラス細工のように透き通った刀身は、リリスの身長ほどもあった。

「そんなものを誇るな。ったく、夢にはいなかったぞ、あいつら」
カナンはぼやきながら、視線を頭上に戻した。ふたりの力天使の効果速度は、極めてゆつたりとしていた。こちらを警戒しているのか、それとも、はなから眼中にないのか。

「おまえ如き、権天使以下で事足りるのだ。はっはっはっ」

実に楽しそうに笑うリリスに、カナンは、振り向き様に右手を向けた。手の先に小さなエンジェル・リングが現れ、簡単な攻撃魔法の詠唱を始める。

「黙れ、消し炭にするぞ」

「いやゝ怖ゝい」

刀を抱えていやいやするリリスに、カナンは、半眼で告げた。

「全然可愛くないからな、おまえ」

「ひどいな」

憮然と、リリス。まるっきり納得していない、といった様子だった。

「まったくだな。まったく、ひどい有様だ」

カナンは、意識が急激に冷えていくのを認めた。なぜかは理解していた。力天使たちが、道路に降り立ったのだ。魔法での牽制もなく、だ。

馬鹿にしている。

「夢も希望もなくした哀れな奴隷のようだよ、おまえら」

力天使を振り返るなり、カナンは、その言葉を呪文の結語として右手の魔法を発動した。手の先で光が爆ぜた。

轟音とともに掌大の火球が五つ、力天使に向かって飛んでいく。雨粒が蒸気となって舞った。

距離は五メートルもない。

魔法の火球は、しかし、どこからともなく吹いた突風に飲まれ、力天使に到達することなく消滅した。力天使の魔法だろう。

細い手をひらひらとさせながら、金髪の力天使が、言った。

「あなたには言われたくないわね。《悪魔》さん」

「《天帝》の奴隷に過ぎないあなたこそ、夢も希望も見失ったのではないですか？」

とは、栗色の髪の力天使。

刹那、リリスがカナンの脇を走り抜け、揺れる銀髪が視界を彩った。リリスの冷笑が響く。

「《悪魔》が夢を見るものか」

ガラスの長刀を構えたリリスが、金髪の力天使に殺到する。力天使は、軽く後方に飛ぶと、目の前に魔法の壁を構築して見せた。リリスが、その障壁を一刀の下に斬り崩す。魔法壁の破片が、耳障りな音を立てながら路上に散乱して、消えた。

「夢を見たから、堕ちたのでしょうか？」

「そうだな」

力天使の問いに適当に答えて、カナンは、右手を足元に叩きつけた。当初から構成していた魔法を完成させる。

「獄門の守護獣よ！」

第二夜 夢に遊べと病は誘う（4）

カナンの右手の接点から黒い陽炎のような波紋が生まれ、アスファルトを飲み込みように広がっていく。

暗黒の波動は、怨嗟の叫びの如き異音を上げた。力天使が、その流動する闇から逃れて空中に浮かんだ。天使が、左手を天に掲げ、右手で地を指し示す。声が響いた。

「我が裡の虎——尾を噛む蛇——地を這う鳳」

力天使の三重詠唱による魔法の連鎖発動を確認して、カナンは、口の端に笑みを浮かべた。カナンの生み出した闇の泉の深淵から、咆哮が聞こえた。

力天使の胸元に光の紋様が浮かび、左手の先から一条の雷光が蛇行しながらカナンに飛来し、右手の指先に生じた紅蓮の火球は、翼を広げた大鳥の如き威容を見せつけて、落ちる。闇の波紋へ。

カナンは、右腕を頭上に振り上げた。生き物のように腕に絡みついた闇が、雨に染まる空間を侵蝕するかのように虚空に散らばる。

天使の雷は、急角度の蛇行を繰り返しながらカナンを襲ったが、闇の粒子によって築かれた防壁に阻まれた。雷はのたうつように暴れ回り、やがて闇の泉に囚われて消えた。

そのままカナンは、右手の人差し指を力天使に向けた。獰猛な獣の雄叫びが轟く。

闇の泉が中心から大きく盛り上がり、なにか巨大なものが姿を見せようとする。無数の闇の粒子が飛沫となって舞い踊って、その現出を祝福する。

それは、漆黒の巨獣——

「素晴らしい術式ですね」

力天使の他人事のような感想の間にも、黒き怪物が闇の中からその全容を明らかにしていく。獅子のような頭部、鬣はどす黒い血の色、一對の巨大な角はねじれ曲がっていた。

頑強な牙の並ぶ口は大きく、液体のような闇が滴り落ちた。黒、
としか言い様のない巨体は、筋骨隆々たる上体は人間の男のそれ
である。

全身漆黒の体毛に覆われているようでもあり、流動する闇のよう
でもあった。

巨獣は、突っこんできた大火球を右拳の一撃で粉碎し、上昇を続
ける力天使に追いつがるかのように、その巨体をさらに膨張させて
いく。

「疑似召喚術式の構成の美しさには誰だって息を飲むさ」

自画自賛して、カナンは、ビルに比肩するほどに巨大化した怪獣
の背中を駆け上りながら、新たな魔法の術式を構成していた。

巨獣は既に、カナンの支配から放たれた。無論、魔法によって生
み出された化け物は、術式に組み込まれた命令のみを実行するだけ
だ。

つまりは、力天使の粉碎。

巨獣が、馬鹿でかいという声とともに繰り出した拳打のラッシュ
は、しかし、力天使の胸元に展開していた光の紋様に遮られた。そ
れでも、化け物は攻勢を緩めない。

「いやー絶景かな絶景かな」

カナンは、ようやく化け物の頭頂部に辿り着き、見晴らしのよさ
に軽く眩暈を覚えた。巨獣の身体は、既に並び立つビル群を追い抜
いている。

といっても、巨獣の体がビルを圧迫して傷つけるようなことはな
かった。ビルの壁や窓に触れた部分は、無数の粒子となって分散し
ていた。

都市内の建物を傷つけてはならない。

それも、カナンが魔法に組み込んだ命令のひとつだった。

「さて」

カナンは、視線を前方に定めた。

栗色の髪の色天使が、空中を漂っていた。巨獣の猛攻をもとも

せずに。

「嘆かわしいことですが、わたしにあなたを殺す力はない」

唐突に、力天使。心から嘆き悲しんでいるような口ぶりだった。

天使が左右に伸ばした両手の内に、白い炎が灯る。炎は、暗い曇天を焼くように燃え上がった。

「《悪魔》を屠るほどの力が、この世にどれだけあるというのでしょうか」

力天使の両腕がしなやかな軌跡を描き、純白の炎が膨張した。力天使の支配から解放された魔法の炎は、降りしきる冷雨をも喰らいながらカナンへと飛来する。

カナンは、翔んだ。前方へ。力天使に向かってまっしぐらに。

ふたつの炎は、それぞれ別の軌道を辿る。ひとつはカナンを目標として急速旋回し、ひとつは巨獣の顔面に突き刺さって爆裂した。

巨獣の悲鳴が、《封印都市》の上空に響き渡る。

「ですが、あなたは敗れ去る」

カナンは、中空で後ろを振り返った。白炎が、猛然と迫ってきていた。

その向こう側で、漆黒の巨軀が崩壊を始めていた。天使の魔法の威力に耐えきれなかったのだ。

「呪縛の幽姫よ」

カナンは、左手を投げるように繰り出しながら、魔法を発動した。左手の先の空間がぐにやりと歪み、粗雑な不協和音が奏でられる。

白き炎が、その空間の歪みにぶつかると、凄まじい金切り声とともに無数の黒い荊のようなものが、その歪みの中から現れた。白炎を捕らえ、そのまま押し包んでいく。

カナンは、その魔法同士の衝突を見届けずに、天使へと向き直った――

「!？」

カナンが驚愕したのは、すぐ目の前に天使の顔が在ったからだ。
(なにやってんだ！ 俺は！)

カナンはただ、力天使の接近に毛ほども気づかなかった己の不甲斐なさを呪った。

「あなたを滅ぼすのは、夢の力」

吐息すら触れ合うほどの距離だった。

力天使の両手が、カナンの顔を包み込む。慈しむように優しく、儚くも愛しそうに。

マスクのような黒い帯で隠された天使の眼は、どんな表情をしているのだろう。ふと、カナンはそんなことを想った。

「夢の一時、その果ての果てまで、楽しみましょう」

力天使の唇が、カナンの口を塞いだ。

芳しい花の薫りがした。

開け放たれた窓から入り込む風とともに、鼻腔をくすぐるのは甘い花の薫りだった。

極至近距離に、サラ・ブレットの紅潮した顔があった。目を閉じている。カナンは、睫が綺麗だと思った。

柔らかな感触を唇に認めて、カナンは、自分がサラと口付けている最中だったことを思い出した。

彼女のか細い肩を抱き、愛情を確かめ合うように、ただ唇を重ねている。

それ以上は必要なかった。

それだけで、ふたりの心は満たされた。

ふたりは唇を離すと、至福の表情を浮かべて、しばらくの間見つめ合っていた。

いつものように。

「見—ちゃった？」

「こんなところで堂々とキスしちゃうなんて、さっすがだね兄貴」
『！？』

カナンとサラは、驚きと恥ずかしさで顔を真っ赤にしながら、同時に声がした方向に目を向けた。慌てて体を離して、何事もなかったかのような顔をしてみせる。何もかも遅すぎたが。

誰もいないはずの放課後の教室。窓はなぜか全開で、空色のカーテンが緩やかににはためいていた。窓の向こうに広がるのは、学校の校庭であり、広い運動場であった。夕闇が迫る校庭に人影は見えない。

というより、校舎の三階にある教室の真ん中にいるカナンからは、校庭の仔細な様子など把握できるはずもなかった。

壁一面の黒板には、でかでかと「不純異性交遊禁止！」とチョークで書き殴られていた。日付は十月一日。だれもが楽しみに待ち焦がれる市民の日は、明後日だ。

そういえば、今日はその日のパレードについて話をしたくて、サラの教室にまで来たのだと、カナンは思い出した。

そして、クオンとエリザ・ベスがいた。クオンは、大きな教壇に腰を下ろして、足をぶらぶらさせながらこちらを見ていた。エリザは、クオンを背後から抱き締めるような格好で、こちらを見ていた。ふたりとも、満面の笑顔である。

「実にいい天気ですね」

とは、サラ。どこか気恥ずかしそうに、ふたりから目を逸らしていた。

エリザが、からかうように笑う。

「もう天気はどうのつて時間じゃないでしょ」

「じゃあ、明日も晴れるといいですね」

「なにが「じゃあ」なの？ もはや話題逸らしたってしょうがないわよ？」

「え、えーと……」

エリザの笑顔の迫力に敗北したのか、サラが、どうしようもなさ

げにカナンを見てきた。

カナンは、やや間を置いてから、一言だけ告げた。

「ま、そういうことだ」

リリス「ラグナガーデンにとってそれは、予期していた事態ではあった。

「あの間抜け……！」

舌打ちをしながらも、彼女は、全周囲への注意を怠らなかった。姿を消した力天使の攻撃が、どこから来るのかわかったものじゃない。

《封印都市》ガルナバの沈黙した高層ビル群のど真ん中。

そのビル群は、リリスたちにとっても、力天使にとっても、厄介な障害物にほかならなかった。

建物を壊してはならないという暗黙の了解が、ある。

建物の中に、ガルナバの市民が眠っているはずだ。

夢を見ているのだ。

彼のように。

彼——カナンは、陶醉したような表情で力天使と口付けをしていた。まったく頼りにならないのは、いつものことだ。

うかつな《悪魔》など、笑い話にもならないのだが。

しかし、だからこそ、《天帝》は彼を選んだのかもしれない。

「それはありえない、か？」

リリスは、つぶやきながら、右手で握った刀を頭上に振り上げた。降り続ける雨を背に、金髪の天使がこちらを見下ろしていた。リリスと同様に、高所から相手を見下すのが趣味なのかもしれない。

「リリス「ラグナガーデン……！」」

力天使の叫びが引き金となって、魔法が発動した。彼女の両手から青い光が迸り、豪雨の如くリリスに襲い掛かった。

「フルネームで呼ぶな」

リリスは、頬をわずかばかり紅潮させながら、即座に飛び退いた。直前まで立っていた道路に、無数の光弾が突き刺さり、連続的に爆砕する。アスファルトの破片が舞い踊り、粉塵が視界を遮った。

盛大な爆撃だったが、どうということはない。

リリスは地を蹴って、一足飛びに力天使の背後へと回りこんだ。

耳元で囁く。

「照れるじゃないか」

「!？」

力天使が驚愕とともにこちらを振り返るより早く、リリスの長刀が閃く。天使の右腕が見事に断ち切られ、肘から先が飛んだ。切断面より噴き出すのは、血ではなかった。

眩いばかりの光の洪水――。

「なっ――」

爆発的に膨れ上がる光に包まれて、リリスは、なす術もなかった。それは魔法の輝き。対抗手段はあったはずだ。しかし、意識を圧倒する光の前に、思考の回転は止まってしまう。

「お馬鹿さん♪」

膨大な光の渦に飲み込まれながら、リリスは、確かに力天使の嘲笑を聞いた。言い返せるはずもない。

リリスは、己もまた夢の国へと誘われたのだらうと、薄れゆく意識の中で思った。

太陽が地平の彼方に沈むときは、どうしてああもあざやかな光を

発するのだろう。

燃え上がる夕焼けと、迫り来る夜闇が織り成すコントラストに満足感を抱きながら、カナンは、わりとどうでもいいことを思い浮かべていた。

学校からの帰路。

学業区の整然とした街並みは、どこも似たような景色に見えるため、歩き慣れたものですら迷子になることがある。

吹き抜ける風に混じる夜の冷気の心地好さに、カナンは、我知らず笑みをこぼしていた。

「どうしたんですか？」

「えっ……？」

隣を歩くサラの問いかけに、カナンは、驚きのあまり情けない声を上げた。

歩道の上。

街灯の天使像の胸元に抱かれた水晶灯が、淡く穏やかな光を放っていた。

その光を浴びたサラの姿は、さながら天使のようで、カナンには、なんとも言い様のない複雑な感情が沸き上がった。

「とても楽しそうだったので、どうしたのかなって……」

「そりゃあ、兄貴はいま幸せの絶頂だしね」

小首を傾げるサラに、前を進むエリザが振り返りながら告げた。

彼女は、怪我でもしたのか、右腕に包帯を巻いていた。いつ怪我をしたのかはわからないが、それは当然だろう。

カナンが、彼女のすべてを知っているなんてことはありえないのだ。

自転車を押しながら歩くクオンが、追い打ちをかけるように続く。

「ここから降る一方だもんね」

心の底から愉快に笑う弟たちに、カナンは、声を荒げる気力すらなかった。どつと押し寄せる疲れに任せて、つぶやく。

「おまえらなあ、俺をなんだと思ってるんだ？」

カナンの言葉に、エリザが足を止めてにこやかに笑った。

「あはは。じゃ、わたしたちはここで」

十字路の前だった。そこを北へ曲がれば、サラやエリザの住む屋敷がある高級住宅街があり、南に下りればカナンたちのぼろアパートがある平民街へと辿り着いた。

カナンとクオンは、彼女らを家まで送ることはしなかった。遠慮がある。彼女らがいくら気にしないといっても、こちらはどうしても氣を使ってしまうのだ。

そもそも、ガルナバの治安は大陸最高と謳われるほどだ。ここ四年に限って言えば、たったひとつの軽犯罪すら起きていない。夜道ですら安全面での心配はなかった。

そういう意味では、送る必要などないとはいえる。

もっとも、親しい女性を家まで送るというのは、身の安全を護るため、という一点だけで行うものでもないのだが。

「うん。じゃあ、氣をつけてね」

クオンは、自転車を停車すると、エリザに歩み寄った。エリザが少し屈む。長身のエリザとクオンでは、大人と子供ほどの身長差があるのだ。

クオンが、いつものように堂々と、エリザの右頬に口付けをした。それを横目で見たあと、カナンは、ちょっとだけ照れくさくなった。それは、サラも同じらしく、彼の前に立つてもじもじとしていた。

「あ、あの」

さきに口を開いたのは、サラだった。空は既に闇が大勢を占めているが、至近距離ということもあって、その照れた表情の隅から隅まで見えた。

「今日も一日楽しかったです。本当に」

カナンは、透かさず言った。あふれてくる愛しさに表情が緩む。
「俺もだよ」

しばらく見詰め合って、サラが、笑顔を見せた。

「また、明日」

エリザとともに歩き出した彼女の背中を見つめながら、カナンの胸のうちには、一抹の不安が去来していた。

「また明日……か」

明日なんて永遠に来ないような気がした。

「カナン」

不意に名を呼ばれて、カナンは、クオンに向き直った。天使像の水晶灯から降り注ぐ光の中で、その少年は、ただこちらを見ていた。いつもとは、何かが違う。纏う雰囲気も、周囲の空気の質感も。

「いま、幸せ？」

少年の問いに、カナンはうなずくしかなかった。そう、確かに幸せだった。面白い弟と、弟の楽しい彼女、そして己の最愛のひとに囲まれて、学生生活を送っているのだ。

これを幸福といわずして、なんと言うのだろう。

「こんな幸せがいつまでも続けばいいと、思ってる？」

それもまた、カナンは肯定した。だが、この夢のような生活がいつまでも続かないことも知っている。

時計の針は進んでいく。

時が立てば、ひとも変わるし、状況も変わる。ずっと学生でいられるはずもなければ、弟やその彼女たちと戯れ続けることなどできやしない。

いずれ、別離のときは来る。

少年が、カナンに手を差し伸べてきた。

「それなら、夢を見ていようよ」

それは甘美な誘い。

「ぼくと一緒にさ」

人知れず忍び寄る、病。

「永遠の夢を見よう」

それは出来ない。やらなければならないことがある――
カナンは叫んだけれど、それは声にすらならなかった。
世界が、急激に形を変えていく。

第三夜 幻想虚構無限回廊（1）

「ねえ、いつまで寝ているの？」

カナンの耳元に囁かれたのは、知らない少女の声だった。その軽やかで可愛い声は、しかし、眠りに落ちていたカナンの頭の中にはきんきんと反響して、ただうるさかった。

「ねえ、いつまで夢を見ているの？」

だからといってすぐに起きられるわけもなく、カナンは、枕を被って少女の声を掻き消そうとした。眠っていたかった。

このまま、永遠に。

「ねえ、あなたはどんな夢を見ているの？」

少女がしつこく問いかけてくることに、カナンは、さすがに苛立ちを覚え始めていた。そもそも、彼女はどこから入ってきたのだろう。ここは、カナンの部屋であるはずだ。だれも立ち入ることが出来ないようにしていたはずだ。

「この夢の残骸で築かれた虚ろな楽園で」

カナンは、はっと目を開いた。枕で塞がれかけた視界の先に、白い細腕と黒いワンピースが見えた。

「わたしは——」

暗闇の中、歓声が聞こえていた。

満場の大歓声。

だれもが、そのときを待ち侘びているのがわかる。

「さあ、ついにこのときがやってまいりました！」

熟練の実況アナウンサーの声がマイクに乗って、広い広い闘技場

の隅々まで行き渡っていくのがわかる。数え切れないほどの観客が、歓声を上げてそれに答えていた。

「決勝戦です！」

普段は運動競技などに使用される半球形の競技場は、ここ数日、いつもとはまったく異なる目的で使用されていた。

この工業区の数少ない娯楽のために。

「この三年に一度のガルナバン・バトル・ドリームも、この戦いの結果を以て一旦幕を閉じることになります！」

アナウンサーの言葉にも熱が籠る。彼にとっても、三年に一度の晴れ舞台なのだろう。

ガルナバン・バトル・ドリーム——つまるところそれは、なんでもありの格闘競技大会であり、三年に一度の周期で開催され、大会への参加者や観客は、工業区だけではなく、ガルナバの至るところから集まってきた。

「が！ 例年以上に白熱し、激戦を繰り返したトーナメントを制した彼らの決戦は、ガルナバン・バトル・ドリームに有終の美を飾ってくれることでしょう！」

観客席からの盛大な拍手が、アナウンサーの舌を滑らかにしている。

「まずは、東門よりの入場！」

長い長い通路の先、重量感のある鉄の扉が、ゆっくりと開かれていった。

「どこからともなく現れた黒衣の少年！」

扉が開かれるのとともに差し込んできた日の光の眩しさに、カナンは、目を細めた。出場者控え室から闘技場までの廊下には、明かりなんてほとんどなかったのだ。

「その活躍に誰が予想したでしょう！」

頭上には、雲ひとつない晴天があった。全天候型ドームの屋根が、青空の美しさを知らしめるために展開されているのだ。

「その身のこなしは疾風の如く、その猛攻は烈火の如く！」

中天に輝く太陽が、現在が正午だということを教えていた。

「舞い踊るように相手を翻弄し、電光石火に攻め立てるその戦いぶりには、誰もが目を見張る！」

広い競技場の真ん中に、円形のリングが配置されていた。リング上には、いかつい顔のレフェリーが立っている。白と黒のストライプの衣装を身につけているが、それには、勝敗の白黒をはっきりさせる意味があるとか。

「数日前まで無名であったはずの少年は、しかし、このガルナバン・バトル・ドリームで一躍有名人の仲間入りだ！」

アナウンサーは、競技場の観客席と同化した実況席から、マイクを通して声を張り上げていた。心地の良い声音だった。

「黄昏の黒衣カナン！」

その二つ名はどうなんだと思いつつも、カナンは、観客の歓声に応えるために手を上げた。少し照れくさい。

どこからともなく嬌声が上がったような気がした。

「続いて……西門より入場致します——！」

アナウンサーの気合いの入れ方が違うのは、仕方のないことだろう。

「ガルナバの黒い夢と呼ばれるようになって、どれほどのときが流れたのでしょうか」

カナンは、遙か前方の控え室へと通じる扉が開かれていくのを見ていた。わずかばかりの扉の隙間から迸った強烈な重圧に、軽い吐き気すら覚えて、カナンは、愕然とした。

次元が違う。

「最強の二字を欲しいままにし、あらゆる難敵を一撃の元に葬り去ってきた漆黒の王者！」

観客が、一斉に静まり返る。

そう、それは、儀式のようなものだった。

「その一撃はリングを砕き、その一閃は大気を切り裂く！まさに古今無双とはあなたのためにある！」

アナウンサーの震える声だけが、闘技場の中に響いていた。だれもが、その登場を待ち焦がれている。固唾を吞んで見守っている。それは、この工業区という、夢の都の中でも極めて異質な区画のすべての幻想を背負う存在だった。

「漆黒の天使リリス」ラグナガーデン！」

カナンは、こけた。

躓くようなものもなければ、歩いてもいないのに、である。なぜかはわからないが、そうしなければならぬような気がした。自分でも理解の出来ない使命感のようなものに突き動かされたのだ。

「いてて……」

石のリングに打ち付けて痛む顔面を引き剥がしながら、カナンは、前方を見やった。審判の呆気に取りれたような反応は無視しておく自分でも理解不能な行動だった。説明のしようがない。

開け放たれた門の内に満ちた闇の中から姿を現したのは、黒き異形の甲冑に身を包んだ長身の人物だった。龍とも獅子ともつかない化け物を模した全身鎧は、しかし、性別を隠すつもりならば無理があっただろう。

その胸当ては、豊満なバストを強調しているとしか思えず、腰当てと白を貴重としたスカートの隙間から覗く素肌の太腿が、性別を超えて刺激した。

化け物の口の中にある顔は、仮面で覆われていて、見えやしないが。

リングに上がってきた相手を見つめながら、カナンは、いつの間にか威圧感がなくなっていることに気づいた。なにが原因かはわからなかったが、これならば全力で戦うことが出来るだろう。

「よくぞここまで、といたいところだがな。君の奇跡の快進撃もここまでだ」

「うん、いや、なんでもいいんだが、似合わないぞ、それ」

びっ、と指でこちらを指し示してきた鎧の女に、カナンは、激しく疲れを覚えた。彼女は格好良く決めたつもりなのだろうが、カナ

ンは、極めて滑稽な猿芝居でも見せられているような気分になった。目の前で、視線をそらすことも出来ない。

「君の夢はここで終わる。わたしという現実の前に脆くも崩れ去る」
彼女は、自分に酔っているのだろうか。言動の端々に陶酔の響きがあった。

「それが運命。この闘技場を支配するのはこのわたし、リリス＝ラグナガーデンだ！」

演劇的な身振り手振りで宣告してきた彼女に、カナンは、頭を抱えたくなった。

「おおっと、これはどうしたことでしょう！ 沈黙の女神の異名を持つリリス選手らしからぬ挑発行為だ！」

アナウンサーの情熱的な叫び声に、会場の客席を埋め尽くす人々が一斉に歓声を上げた。競技場全体が揺れるほどのどよめきが起る。

「対するカナン選手は――！」

煽るような実況のせいで、自分にすべての観衆の視線が集中したのを認めて、カナンは、啞然と周囲を見やった。円形の競技場の客席を塗り潰すひとの群れが、カナンの反応に多大な期待を寄せている。

「えーと、これはなにかやらなきやならんのだな？」

だれとはなしにつぶやきながら、覚悟を決める。だれかの思い描いた通りに進んでいるような気がして悔しいが、それは仕方がないいま、この場の空気を壊すほどの勇氣もない。

いや、それは勇氣とは呼ばないのかもしれないが。

どちらにせよカナンは、リリス、審判、実況アナウンサー、観衆の無言の圧力に、屈した。

「はっ、運命だと？ 寝言は寝て言え！」

声を荒げながら、カナンは、自分の顔面が熱を帯びていくの思い知っていた。恥ずかしさのあまり、顔が真っ赤になっていく。

「俺はどんな運命にも屈しない！」

恥ずかしさにもだえながら、しかし、カナンは、声を張り上げることにある種の快感を覚えていた。腹の底から声を出すことなど、そうそうあるわけもないのだ。

「たとえ運命が破滅的な未来を用意しようとも、俺は！」

カナンは、大見得を切るように一歩踏み出した。同時に、違和感を抱く。物音がなにひとつ聞こえなくなっていた。さっきまで聴こえていたはずの観客の野次や罵声、あるいは嬌声や奇声なども。

そして、声が聴こえた。

「あなたは、どんな未来を夢に見るの？」

少女の声だった。春の風のように軽やかで、小さな花のように可愛らしい音色。

カナンは、すぐに声のした方向に体を向けながら、自分以外の誰もが動きを止めていることに気が付いた。呼吸さえも忘れて、硬直している。なにが起こったのか、さっぱりわからなかったが、いまはそれどころではなかった。

「俺は……」

少女は、競技場の壁に背を預けるように立っていた。あざやかな金髪を長く伸ばし、喪服のように黒いワンピースを身につけた少女。愛らしい顔立ちは、美少女と呼ぶに相応しかったが、どこか生気がないように感じられた。青い瞳が、虚ろに揺れている。

「なんだ？」

不意に、カナンは、焦燥感に苛まれた。少女の問いに答えるつもりで口を開いたものの、言葉の続きが出てくることはなく、それどころか大事なものを見失っていた。

「俺はだれだ？」

そう、彼は、もはや自分がなにものなのかさえ思い出せずにいた。自分を定義するはずの名前すらも、記憶の庭から消え失せている。

「くそっ、どうなってやがる！ なにも思い出せない……！」

彼は、自分を忘れたことへの焦りと怒りで、気が狂いそうになっていた。

「夢は、夢。あなたの現実はこちらにはないの。当然、わたしの現実も」

少女の声だけが、彼の心に癒しを齎した。なぜだろう。その声音には、不思議な力が合った。狂い落ちていく心を、再び、浮上させてくれる。

彼は、深呼吸してみた。脳裏に、一瞬、なにかが過ぎった。何度も何度も、空気を吸って、吐き出す。

脳裏に過ぎるそれが、次第に鮮明な輪郭を見せていく。名前だった。

カナン。

「君は？」

カナンは、安堵とともに落ち着きを取り戻すと、少女へと歩み寄ろうとした。

「わたしも、それを探しているの」

少女が、カナンから視線を逸らす。

「きっと、この夢の残骸のどこかに埋もれているはずなの」

その横顔はとても儚く見えた。

「きっと——」

第三夜 幻想虚構無限回廊（2）

雨が降っている。

灰色の雨。

凍てつくほどに冷え切って、街の色すら塗り替えていくようだった。

ここは工業区。

ガルナバに作り上げられたひとつの夢の形。

種々様々な工場が数え切れないほどに存在し、働くことを夢に見たひとびとが集う、鉄と鋼とコンクリートの迷宮。

その複雑に絡み合った迷路のような街の一角を、カナンは、ただひたすらに走っていた。全力で、脇目も振らず、本能の命じるがままに前進する。

なぜなのかはすぐに思い出せなかったが、とにかく、走り続けなければならぬことは全身を駆け巡る焦燥感が必死に教えてくれていた。

「まったく、なんなんだよ！ 今度はっ！」

だれとはなしに叫んで、カナンは、前方にひとの波があることに気づいた。入り組んだ狭い路地を進んでいるうちに、大通りに出ようとしていた。

ガルナバの西門から工業区を一文字に貫いて直轄区へと至る、まさにメイン・ストリートである。

当然、人通りは多いのだが、生憎の雨だ。傘を差した場違いの力ツプルや、レインコートの子供たち、店の軒先で雨をやり過ごそうとするひとびとの姿が見えた。

そんなひとたちの間隙を縫うように進みながら、カナンは、ひとつだけ疑問を浮かべた。どうして、工業区がこれほどの人出で賑わっているのだろうか。

仕事に従事する人たちや、その家族だけでは、雨の通りを埋め尽

後に聴こえていた。周囲のひとびとの悲鳴と、恐慌も。

「俺って、いったいなんなんだ？」

カナンは、背後を振り向きながら、自分の頭の中に大きな空白があることに戦慄した。一際強く輝くのは、カナンという自己を定義する名前であり、記憶を乱す嵐の中でも、それだけは揺るがないらしい。

自分の名前以外に思い出せるものといえば、例えば猛然とこちらに向かってくる美女の名前であり、彼女の武装のすべてであり、彼女が発動した魔法の詳細である。

極めて精緻で複雑な、有体に言えば美しい神秘言語の構成が織り成す擬似召喚術式。《縛鎖^{フウエイル・レイル}の群狼》。

「って、魔法かよ!？」

カナンは、驚愕すると同時に、すぐさま視線を巡らせた。大通りを満たしていたはずの人波は、その出現で蜘蛛の子を散らしたようになり、カナンとリリスの間には障害物ひとつなかった。多くの市民は、その存在を目の当たりにして逃げていったが、それでも遠巻きにこちらの様子を伺うものたちもいる。なにが起きているのか知りたいのだろうか。なんにせよ、人間には理解不能だろうが。直線を突き進むリリスの背部に展開したエンジェル・リングに見惚れかけつつ、カナンは、彼女の周囲に六頭の銀狼を確認した。獰猛な野獣そのものの面構えを見せる狼たちの双眸からは、紅蓮の炎が噴き出している。

リリスの魔法を見るのは、ずいぶん久しぶりな気がした。それはきつと気のせいではないはずだ。彼女は、《封印都市》内では魔法を行使できない――

そこまで考えて、カナンは、はっとした。叫ぶ。

「リリス！」

リリスは、こちらに向かったの疾走を止めない。それは、散開した銀狼も同じだった。狼たちは、カナンを包囲するように大きく展開している。

「観念したか？」

リリスが笑う。こうなることが最初から分かっていたような、そんな笑み。カナンにとって気に食わないタイプの表情だった。しかし構わず、続ける。

「ここはガルナバだぞ！」

声を張り上げながら、カナンは、エンジェル・リングを発動した。脳裏に浮かぶイメージに適した魔法を具体化するために、エンジェル・リングが、神秘言語を術式化していく。

「だったらどうした！」

苛立たしげに、リリス。そのいびつな表情は、飄々としてなにを考えているのかわからない普段の彼女からは、程遠いものだ。とはいえ、実物が同じ顔をしないというわけでもなく、

「ここは《封印都市》ん中だぜ」

カナンは、右斜め後ろから音もなく飛びかかってきた銀狼の顔面に右足の踵を叩き込むと、続いて、頭上に左腕を掲げた。いつの間にか高く飛び上がっていた一頭が、上空から落下してくるのが見える。手の先に小さな光輪が生まれ、その中から爆発的に膨れ上がった光が、一条の光芒となって銀狼を飲み込んで、降りしきる雨を蒸発させながら鉛色の空に群青の穴を開けた。

なぜか、虹が生じた。

「だからそれがなんだと——！」

遂に怒気を発したリリスの両手には、ガラスの太刀が握られている。太刀を翳して、カナンへと殺到してくる。

カナンは、笑った。両腕を広げて、いかにも彼女を迎え入れるように振舞ってみせる。心の底から、すべてを受け入れるように。リリスの表情に、かすかな動揺が生まれた。

「すべては夢ってことさ」

カナンは、ふたたび笑った。銀狼の牙が左足首に食い込み、銀狼の爪が背中を切り裂き、

銀狼の咆哮が電光となって全身を焼き、リリスの刀が腹部を刺し貫

くのを、ただ他人事のように感じていた。

なぜか愕然とするリリスの遙か向こうに、黒いワンピースの少女がさ迷っていた。

「はっ……つまんねえ夢だな」

激痛が、カナンの意識を徹底的に破壊していく。

頭上には、曇天がある。

雨はいまにも降り出しそうだったが、喪服の街は、これ以上黒く塗り潰せそうにはなかった。

喪服の街。

その日、夢の都ガルナバは、この都市始まって以来の静寂に包まれていた。だれもが悲しみに暮れ、嘆きと哀れみの色彩に染め上げられていた。

だれもが口を閉ざし、だれもが喪服に袖を通し、どれもがその葬列に加わっていた。

長い長い喪服のひとびとの列は、商業区、工業区、学業区、興行特区のいたるところで生じ、都市の中心部——直轄区・市庁舎へと向かっていた。

何百万人もの市民が、たったひとつの目標に向かって列を成している。しかも事故や騒ぎはまったく起きず、整然としたものだった。

「おまえだけ場違いだな」

工業区から伸びる葬列の中ほどに並ぶカナンは、すぐ隣を歩く少年を見て、うんざりと言った。周囲には喪服の市民が、無言のまま列の進行に応じて歩いている。

「だって、雨が降りそうなんだよ？」

クオンは、当然だとも言わんばかりに、その真っ赤なレインコ

トを見せ付けてきた。「風邪引きたくないし」

「傘でいいだろ」

「いやだ」

「わがままな奴」

「カナ兄には言われたくないや」

十二歳になったばかりの少年の考え方ではないとは思うのだが、だからといって、こんな場所で喧嘩をしている場合でもない。

カナンは、軽く嘆息した。弟の事で嘆いているときではないのだが。カナンを含め、だれもが喪服を身に付け、沈痛な面持ちで市庁舎へと向かうのには、このガルナバにとってきわめて重大な事件があったからだ。

それは、この都市の有様を根本から変えてしまうほどに重大な――

「これは……」

聞いたことのある少女の声に、カナンは、即座に視線を巡らせた。小さな声だった。普通ならば絶対に聴こえないほど小さい音。だが、この暗い沈黙の中では、よく響いたのだ。

大通りの端に佇む黒いワンピースの少女が、どこか思い詰めたような表情で、この葬列を見ていた。

その虚ろな瞳に、一瞬だけ、光が走った。

「ああ、これは――」

「おおっと！ リリス選手のカウンターが決まったああああっ！！！！」

腹を抉るような激しい痛みと、実況アナウンサーの耳障りな大声が、カナンの意識を呼び戻した。

リングの、上空。

（また……か）

胸中つぶやきながら、カナンは、腹部に強烈な蹴りを叩き込まれて、吹き飛ばされていた。相手の脚力が凄まじいだけではない。彼女の身に纏う全身鎧は、脚部もしっかりと覆っており、蹴りによる威力を助長していた。

胃液が込み上げてくるのをなんとか堪えつつ、リングに上手く落下する。

「また……？」

リングに着地したカナンは、脳裏に浮かんだ疑問を口にした。観客が、一瞬の空中戦に大歓声を上げる。常人では為しえないような攻防が上空で繰り広げられたのだ。

だれだって、驚嘆するか感嘆するしかなかった。

しかし、カナンが気になるのは、そんな些細なことではなかった。もつと大きななにかが、カナンの脳裏で蠢いている。

とても重大な、なにか。

それを掴むことができれば、きっとこのつまらない物語を終わらせることができるはずだ。

「そう、くだらない幻想なんだ、これは」

わずかに疼く頭を押さえて、カナンは、リリスの殺気が頭上から降ってくるのを認識した。鋭角的な攻撃意志。

「ライトニング・メテオ・キークーッ！」

妙に甲高いリリスの叫び声が、広い闘技場に響き渡る。と、上空に浮かぶ彼女の全身が、眩いばかりの雷光に包まれ、リングに向かって物凄い勢いで落下してきた。

大気を引き裂きながら迫り来るリリスに対し、カナンは、驚きながらもため息を浮かべた。

「なんだよそりゃ」

それは間違いなく魔法だった。雷光の発生——及び脚部への付与——即ち……

「ライトニング・メテオ・キック？ 長たらしい上に、ダサイ」

半眼で告げて、カナンは、自身のエンジェル・リングを展開した。右腕を頭上に掲げる。雷光の塊は、すでに目前に迫っていた。

「障壁の構築——及び術式の解析——そして、分解——即ち破魔」
神秘言語の羅列たる光の輪が、凄まじい速度で回転し、カナンの望み通りの術式を構築していく。

それは一瞬。

まさに刹那の出来事に他ならない。

激烈な電光を帯びたリリスの脚は、カナンの掲げた右手に触れようとしていた。

「背約者よ」

カナンが呪文の末尾を口にしたとき、彼がイメージした世界が現出した。

「!？」

驚愕したのは、きつと、リリス。

カナンの右手の先に、綺麗な光が波紋のように広がり、リリスの雷光蹴りを受け止めた。強力な魔法同士が衝突した余波が、電光の嵐となってふたりの周囲を盛大に飾り立てた。

観客たちの悲鳴とも嬌声ともつかない歓声が、吹き荒れる破壊の嵐の中でも聞こえた。

そう、破壊の嵐。

カナンの魔法障壁にぶつかったリリスの雷撃魔法が、周囲に無数の雷の矢となって飛び散り、リングに当たっては打ち砕いたのだ。

粉煙が舞い踊る。

「カナン貴様！」

リリスの叫び声は、こちらの意図を理解したからだろう。

「《封印都市》では魔法を行使できない。それがおまえを支配する理であるはずだ」

告げるカナンが創り出した魔法障壁に、美しい幾何学模様が浮かび上がった。すると、その紋様の中から、いくつもの光の帯が現れ、リリスの踵から足首へと絡み付いていく。

「そんなこと！」

「いや、そもそも、リリスならこんなうかつな魔法の使い方はしない」

カナンは、自嘲気味に笑った。

「うかつは俺の専売特許さ」

リリスに絡みついた光の帯が齎すのは、彼女が構成した術式の詳細である。神秘言語のひとつひとつが、カナンの頭の中に叩き込まれていく。

破壊力のみを重視した、歪で、不安定な構成。

リリスらしくは、ない。

「まったく、なにやってんだか」

カナンは、相手の魔法の解析が完了したのを認めると、開いていた右掌を握り締めた。

光の帯の膨張が導くのは、術式の破棄。

「おまえも、夢、見てるのかよ」

リリスを包み込んでいた雷光が硝子細工のように碎け散っていくのを見つめながら、カナンは、気づいた。

というより、思い出したといったほうが正しいのかもしれない。

「夢、か」

夢。

だれの夢なのだろう。

カナンは、だれが描いた夢を見ているのだろう。

いくつかの名前が浮かんでは消えた。頭の中に留め置くことが出来ないのだ。

カナンは、舌打ちした。

魔法の力を完全に破壊されたりリリスが、カナンの魔法の支配から逃れるように身を振った。後方へ、大きく跳躍する。

その姿は、絵になる美しさだった。が。

「いつまでも付き合いきれねーよ」

吐き捨てて、カナンは、背後を振り返った。

「なあ？」

いつぞやの少女が、闘技場の壁にもたれるように立っていた。

「ええ」

少女の声は、はっきりと聞こえた。

カナンは、新たな魔法を構成し始めたリリスに背を向けて、リングを飛び出していた。審判の呼び声も、観衆の呆気に取りられたような反応も、リリスの絶叫も、聞こえない。

「君は、だれだっけ？」

少女が、悲しそうに俯く。

「わからない。を探しているの」

「そうだったな」

そう言って、カナンは、彼女の小さな手を取った。

「行こう」

「どこへ……？」

少女の声は、小鳥の囀りのように小さく、儚い。
だが、聞こえる。はっきりと、耳に届いている。

「さて、どこでしょう？」

カナンは、問い返すようにつぶやくと、後方を振り返った。審判員が、カナンのリングアウトでの敗北を宣言し、リリスの優勝が告げられていた。

夢の中で、空虚な宴は続いていく。

「カナン……！」

リリスのすぐるような叫び声は、カナンには、懐かしく、そして
哀しい響きを伴って聞こえた。

それは、少なくともリング上の彼女が、実際のリリスの情報を元に構築された存在だという証明かもしれない。

「哀れなリリス」

カナンはつぶやきながら、世界が変動していくのを認識した。
夢が移ろう。

第三夜 幻想虚構無限回廊（3）

降りしきる雨の中を、カナンは、傘も差さずに走っていた。何時間走っているのかはわからない。体は既に冷え切っていて、思うように動かない。が、それでも体力余裕があるのは、きっとこれが現実ではないからだ。

（そう、これは夢だ）

カナンは、工業区の迷路のように入り組んだ路地を駆け抜けながら、胸の内で確信していた。

だれかの夢。

見慣れた街の景色すらも塗り替えるほどに降り注ぐ灰色の雨は、避けることなどできるはずもなく、その安易な考えを打ち砕くかのようにその激しさを増していく。

いま、カナンを突き動かすのは、本能ではなかった。みずからの意志で、鉄と鋼とコンクリートの迷宮を疾走している。

だれかに追われている、というのも理解していた。

この場面にも、見覚えがある。

（確かリリスのやつに追われてたんだっけ）

胸中つぶやいて、カナンは、軽く嘆息した。

結局彼女は、夢の中でも、壊れた人形のように振舞うしかないのだろうか。いの一番に救われているべきはずの存在が、煉獄の炎に身も心も焼かれている。

（夢も希望もないな）

とはいえ、カナンは、夢の中で踊っているのだ。だれかが描いた夢の世界で、とりあえず踊り続けている。

踊らされているよりはましだったが、それでも、釈然としないものを感じて、カナンは先を急ぐことにした。

とにかく、この状況を変えなくてはならない。

雨脚は強くなる一方だった。風が吹かないのは、救いに違いない。

が、それすらも、姿の見えないだれかの思惑通りなのだろうが。

「いや」

カナンは、ふと足を止めた。土砂降りの雨が、周囲の建物の屋根や舗装された道路にぶつかって、破壊的な交響曲を奏でている。

身につけた衣服は愚か、全身ずぶぬれだった。水中にいるのとは大差ない。いや、水の中を泳いでいるほうがいくらか有意義だろう。

「知っているはずだ」

滝のような雨水が口に入ってくることもかまわず、カナンは、頭上を仰いだ。天を覆う鉛色の空こそが、この夢の国の正体なのかもしれない。

夢と現を隔絶し、真実を覆い隠す群雲。

降り注ぐのは、雨のような夢。

地に流れ落ちてしまえば、もう二度と掬うこともできない夢の残骸たち。

その夢の亡骸の上に築かれた虚像の樂園。

だれもが夢の日々を謳歌しているのか。それとも、だれもが、たったひとりの男が描き出した夢の国を彩る端役なのか。

カナンは、再び、走り出した。立ち止まっている場合ではない。

早く前へ進まなければ、この状況を打開できない。

（いや、そもそも、この夢の終点はどこだ？）

この逃亡劇の果ては、どこなのだろう。

そんなことを考えている間にカナンは、人通りの多いメイン・ストリートに辿り着いていた。

人波が、凄まじい。

杖をついた老夫婦、レインコートの子供たち、ひとつの傘を翳した恋人たち——だれもが、この豪雨の中を平然と歩いていた。

「夢にしたって不気味ね」

不意に聞こえた少女の声に、カナンは、背後を振り返った。すぐ後ろで、黒いワンピースの少女が漆黒の傘を差していた。

「いつの間に？」

「ついさっき、あなたを見つけたの」

「なら、ちょうどよかった」

「？」

小首を傾げる少女に構わず、カナンは、彼女の空いている左手を取った。

「逃げるぞ」

「え？」

言うが早いか駆け出したカナンは、少女が、思った以上の身軽さでついてきたのを知って、胸中安堵していた。これならなんとかなるだろう。

「逃げるって？」

「じきにわかるさ」

人波を掻き分けて進むのは困難かに思えたが、実際のところ、それほど苦労することはなかった。

カナンたちの進行方向は、なぜか人波の隙間になっていったのだ。カナンが魔法で小細工を施したわけでもない。

まるで、なにかに導かれているような――

カナンの黙考を打ち破ったのは、遙か後方からの叫び声だった。

「そのずぶ濡れ男！　いますぐ立ち止まりなさい！」

「でないと、逮捕しますよ？」

聞き知ったふたりの女の声に、カナンは、苦笑いを浮かべながら、それでも前進を止めなかった。

だれに呼び止められても、いまは、進むしかないのだ。あるかわからないゴールを目指して。

「カナン」

「ああ」

少女に言われるまでもなく、カナンは、気づいていた。

滝のように降り注いでいた雨が上がり、大通りを埋め尽くしていた人波が、いつの間にか消え失せていたのだ。

夢見るものの演出なのだろうか。だとしても、つまらない演出だ

と、カナンは思った。

「おとなしく捕まりなさい！」

「でないと、撃ちますよ？」

またしてもふたりの叫び声。

カナンは、呆れながら後方を一瞥した。警官の格好をしたエリザ・ベスと、サラ・ブレットが、全力疾走でこちらを追いかけてきていた。

ふたりのあまりにも不釣り合いな格好に、カナンは、冷ややかに告げるしかなかった。

「馬鹿馬鹿しい」

足を止めて、カナンは彼女たちに向き直った。少女を背後に庇いながら、左手を掲げる。右手は、少女の左手を握っている。

「そろそろ茶番は終わりにしよう」

カナンは、エンジェル・リングを展開した。無数の神秘言語で形成された光の輪。

エリザが、足を止めて、こちらに対峙する姿勢を取った。ミニのスカートから覗く太腿が眩しい。彼女の背後に、エンジェル・リングが発現した。

「茶番？」

「それはあなたが夢に従う、ということですか？」

とは、サラ。エリザから少し離れているのは、連携のためだろう。こちらのスカートは膝下までであった。サラの背部にも、光の輪が浮かび上がる。

ふたりが術式を編み上げていくの認めて、カナンは、つとめて軽い口調で言った。

「力天使エリザール、力天使サラシエル——おまえらじゃ俺には勝てない」

カナンは、ふたりの天使が、それぞれ高威力の魔法を放ってくることを確認すると、透かさず少女を振り返った。

「？」

「逃げよう！」

カナンは、啞然とする少女に言い訳することもなく、彼女の華奢な体を両腕で抱え上げた。

いわゆる、お姫様抱っこ、である。

「カナン！？」

「このほうが速い！」

赤面する少女に有無を言わず、カナンは、もう一度、力天使たちを振り返った。婦警姿の天使たちの魔法が、完成する。

「切り裂け宝刀！」

エリザールが右腕を真横に振るったのは、呪文の結尾を叫ぶのと同時だった。腕の軌道に発射されたのは、膨大な力によって紡がれた真空の刃。

「はっ、凄いな！」

馬鹿にするわけでもなく叫んで、カナンは、即座にその場で跳躍した。無論、少女は抱えたままだ。

刹那、カナンの足のすぐ下を、真空の刃が通り抜けた。物凄まじい破壊音が、連鎖的に鳴り響く。町全体を揺るがすほどの轟音、である。

「やりすぎだろ」

カナンがばやいたのは、エリザールの魔法によってカナンの逃走経路上の建物という建物が、ことごとく粉碎されていたからだ。

メイン・ストリートに立ち並んでいた喫茶店や、ブティック、雑貨店など、魔法の進路上にあったあらゆる建物が上下真つ二つに両断され、倒壊していた。濛々と立ち込める粉塵は、まるで濃霧のようですらあった。

カナンは、多少の冷や汗を背中に感じた。一瞬でも反応が遅れれば、カナンの体がばらばらになっていたかもしれない。

（その場合、夢の場面が変わっただけか？）

リリスの魔法に蹂躪されたときのように。

カナンは、首を横に振った。今回は、そうではないような気がし

た。なにかが、さつきとは違う。

なにが、なのかはわからないが。

そのとき、サラシエルの囁くような言葉が、なぜかカナンの耳元に閃いた。

「銀の月に踊る子猫」

カナンの後頭部に強烈な衝撃が走った。と、思ったのも束の間、痛烈な衝撃は、カナンの背中や肩、臀部や足に生まれ、中空の彼を吹き飛ばす。

「くう!？」

激痛の連鎖は、カナンの全身を苛み、正常な感覚を奪っていく。猛烈な衝撃の渦の中で、カナンは、相手の魔法がなんであるか察知することもままならない。

ただ、少女の小さな体を庇い続ける。

カナンは、いつも通りの自分のうかつさを呪いながら、少女の耳元に囁きかけた。

「どうやら俺は、君を巻き込んだらしい」

「いいえ。あのひとたち、最初からわたしを巻き込むつもりだったわ」

少女が、笑う。その笑顔の奥に、永遠の孤独にも似た儚さを認めて、カナンは、目を細めた。

「……そうかもな」

激痛の嵐の中で、カナンは、速やかに術式を構築した。神秘言語という理解の範疇を超えた言霊の群れを、一定の法則に従って配列していく。

もともと、その極めて難解で複雑怪奇な作業は、エンジェル・リングという天使特有の霊的器官がほとんど行ってくれるのだが。

だからといって、カナンがなにもしないわけではない。魔法の詳細なイメージを描くのはカナンの頭脳であり、カナンがさまざまな局面に対応した魔法の設計図を描き出せなければ、結局は同じような魔法を使うことしか出来ないのだ。

それは、戦闘能力の大きな欠如と言わざるを得ない。

そんな中でも、加速する痛みは、衣服を引き裂き、皮膚をそぎ、肉体を削っていく。だが、それでもカナンの意識は乱れなかった。研ぎ澄まされた感覚は、痛みをより激しく訴えてくるが、もはや彼には関係のないことだった。

彼は、戦闘に集中すれば、ある程度の痛みなど意識の外に置くことができた。

そして、エンジェル・リングが歌い出す。

カナンは、言葉を発した。魔法を完成させるために。

「紅蓮の王よ」

「まったく」

カナンの足元から噴き出した真紅の爆炎が、まるで意思を持つ生き物のようにうねりながら増殖し、サラシエルの魔法を打ち砕いていく。

やがて紅蓮の炎は形を変えた。憤怒の相をした巨人の如き姿へと。擬似召喚術式——。

「君は途方もないなあ」

クオン＝シオンは、眼下の光景に嘆息を浮かべるしかなかった。カナンが一瞬で作り上げた術式は、極めて複雑に入り組んだ神秘的言語の連鎖であり、それは一見すると幾何学的な、あるいは芸術的な美しさを持ち、見るものの感情を圧倒するのだ。

こんな相手に勝てるわけがない、と。

「たった一つのリングでこれだ」

クオン＝シオンは、笑った。笑うしかなかった。すべての力を解放したのなら、どうなるというのだろう。

「彼女らには無理だよね」

悪戯っぽく笑いながら、彼は、全長五メートルほどの紅蓮の巨人が、力天使たちに向かって進攻を開始するのを認めた。

「でもそれは、普通なら、の話」

工業区のメイン・ストリート。工業区の北側の建物群は、エリザールの魔法によって薙ぎ倒されてしまった。廃墟のような町並みが見える。

それも、問題ではない。

つまるところ。

「ここは夢の世界」

常識も道理も通用しない、理不尽で不可解な幻想領域。

それが、この世界のすべて。

「さあ、見せてごらん」

クオン・シオンは、ただ見ていた。遙か上空で、雲を足場にして逆さまに立つように。

「君たちの忠誠心って奴をさ」

紅蓮の炎が象つたのは筋骨隆々たる巨大な男であり、燃え盛る火炎そのものを表すかのような荒ぶる鬼神の如き相貌をしていた。

それは、吹き荒れる氷塊を吹き飛ばすと、カナンが術式に組み込んだ命令のままに、力天使に向かって進軍を開始した。

足取りは重い。だが、五メートルを越す巨人である。その歩幅はきわめて広く、天使たちとの間合いを詰めるのに時間は掛らないだろう。

「行くぞ！」

カナンは、歩き出した巨人を見送ることもせず駆け出した。そ

の必要はない。カナンの腕の中で、少女が口を開いた。

「東へ」

「直轄区？」

「ええ」

「そこになにかあるのか？」

「わからない。けれど、あの葬列が向かっていたのは、市庁舎……」
少女の言葉が、カナンの記憶を呼び覚ました。脳裏に投影されるのは、雨の中、延々肅々と続く喪服のひとびとの行列だった。

「あの夢は、わたしになにかを教えてくれていたわ。もう少しで、思い出せそうだった——」

世界が揺れた。上下左右。激烈な振動と共に、天変地異でも起きたかのような衝撃が、カナンの全身を襲った。

魔法の防御など、間に合うはずもない。

天が漆黒の闇に覆われ、空気が沈み、冷え切っていく。鳴動は終わらない。

雨音が聞こえた。

それは、瞬く間に嵐の如く吹き荒び、やがて。

「これは……！」

カナンは、突如開けた視界に映る周囲の景色に、多少の驚きを感じた。元より、ここが夢の世界であることは了解していたものの、その変容の直後まで意識が続いたことはなかった。

いつだって、その場面に適した記憶が植えつけられ、その記憶を基準にしたカナンという存在になっていた。

いまは、違う。

「葬列……」

曇天から降りしきる冷雨の中、喪服の人々が長蛇の列を作っていた。

凄まじい人の数だった。そのだれもが黒ずくめであり、だれかの死を嘆き、痛み、悲しんでいた。

沈黙と静寂が、喪服の街を包み込んでいる。

不規則な雨音と、整然とした足音だけが、街を彩っていた。

「この先になにがある？」

カナンは、少女を抱えたまま、走り出した。雨などは何の障害にもならない。問題は、前方を埋め尽くすほどの葬列である。

だれもが心から嘆き悲しんでいるからなのか、その速度は非常に遅かった。遅々として前進しない。市庁舎を目指すならば、その脇を進むしかないのだが、それも難しいように思えた。

さっきまで、横四列の行列だったのが、気づいたときには五列、六列と列が増えていていた。そのうち、参列者だけで大通りを制圧するだろう。

そうになると、メイン・ストリートを走るなんてできるはずもない。「だったら！」

カナンは、ひとを掻き分けるように進みながら、天を仰いだ。無数の傘の隙間から、鉛色の空が覗く。降りしきる雨は、激しさを増していく。

「どうするの？」

「こうするのさ」

カナンは、地面を蹴るようにして跳躍した。ただの跳躍ではない。常人を遥かに凌駕する跳躍力だった。

その間に、エンジェル・リングの歌声が、カナンの紡いだイメージを魔法へと構築していく。

重力の中和、及び空中での姿勢制御、推進力の強化——即ち《飛翔》。

「翼よ！」

カナンの背中から、光で形成された一對の翼が生えた。それは一度羽ばたくと、カナンの体にかかる重力を軽減し、彼の体をさらなる高みへと押し上げていく。

「ねえ、カナン」

雨空へと上昇していく最中、少女が、カナンの襟元を強く握った。振り落とされないように、かも知れない。

「なんだ？」

カナンは、眼下に広がる光景を注視していた。工業区の全体像が見えるほどの高度にまで上昇していた。もはや、なにものにも邪魔されることなく直轄区に向かうことができるだろう。

夢の場面が移り変わってからの力天使たちの行方も気にはなったが、いまは、市庁舎へ向かうことが先決だろう。

そう思いながらも、カナンは、天使たちの奇襲を懸念して、エンジェル・リングをもうひとつ起動した。背後に浮かぶ光輪が、二重の同心円になる。

「あなたは……天使なの？」

少女の疑問も、もつともかもしれない。と、カナンは、工業区の町並みを見下ろしながら思った。工業区の至る所で発生しているらしい沈黙の列は、直轄区に向かってゆっくりと収束していく。

上空から見れば、直轄区を源流とした漆黒の河が、無数の支流に枝分かれしながら工業区全域に流れているように見えた。

それは、葬列に動きが見られないからでもある。

まるで、参列者全員が前進を拒絶しているかのようだった。

直轄区に辿り着くことを嫌がっているような――。

「……天使に見えるかな？」

カナンは、わざとらしくおどけるようにして、光の翼を広げた。

背後に光の輪を浮かべ、背から光の翼を生やした少年。

一見すると、まさに天使そのものだろう。

「ええ」

肯定する少女の可憐な声を聞きながら、カナンは、飛翔速度を上昇させた。少女を抱く腕に力が籠るのは、仕方がない。

無論、少女への当て付けではない。悠然と空を泳いでいる暇などはないのだ。

目的地に急がなければ。

いつ、あの天使どもが襲い掛かってくるかわからないのだ。なるべく急いだほうがいい。

「俺は……」

カナンは、少女の問いに答えようとして、一瞬、口籠もってしまった。答えはある。だが、それが必ずしも正解ではないような気がした。

なぜかはわからない。

この夢の世界で、確かなものなどひとつとして存在しないからかもしれない。

(いや……)

カナンは、急速に高度を下げながら、かぶりを振った。低空飛行に移ったのは、直轄区と工業区を隔絶する巨大な城壁が見えたからだ。

確かなものは、ひとつだけあった。

「俺はカナン」

みずからの名前を口にしながら、彼は、それだけは紛れもない事実でそれ以外のすべては虚構のように想えた。

いま、この腕に抱く少女すらも。

第三夜 幻想虚構無限回廊（4）

「そうね。あなたはカナン」

不意にカナンの脳裏に閃いたのは、力天使の声――

「エリザール！」

カナンが後方を振り返ると、一条の光芒が大気を焼きながら迫ってくる場所だった。紫電を帯びた光線。地上より放たれた魔法は、ただ一直線にカナンを目指している。

その速度は、カナンが回避行動と取る暇すら与えないほどに速い！
「行け！」

カナンは、少女を腕の中から解放した。地上は近い。それにここは、夢の世界。なんとでもなるはずだ。

「えっ……？」

少女の表情が驚きに染まっていくのを、カナンが見届けることはなかった。

破壊的な光の奔流が、カナンの視界を塗り潰したからだ。

「我らの敵。我らがドミニオンの敵」

エリザールの魔法が齎した破壊は、カナンの全身を瞬く間に焼き尽くし、徹底的な痛みを体中に刻み付けていった。皮膚が剥がれ、血が噴き出す。神経という神経が激痛を訴えてくる。

それでも、カナンの意識が正常なのは、これくらいの痛みには慣れているからに他ならない。

「せめて、腕のひとつは持っていてくれないとな」

カナンは、軽く笑うと、自分の両手を一瞥した。傷だらけで血まみれの両手は、しかし、カナンの思い通りに動いていた。もっとも、指先を少し動かすだけで激痛が走ったが。

これでは使い物にならない。

「本当、強すぎるわ」

呆れたようなエリザールの声は、地上――大通りに満ち溢れた葬

列の中から聞こえていた。

「やはり、あなたこそがこの夢にとって最大の障害なのね。《悪魔》よ」

エリザールの言葉を聴きながら、カナンは、魔法を紡いだ。二重のエンジェル・リングは、一瞬で術式を組み上げる。

「癒しのまなざしよ」

淡い光が、カナンの全身を包み込んだ。《治癒》の魔法は、《完治》の下位互換とも呼べる魔法で、カナンの体中の傷を塞いでいった。

痛みは消えない。傷口を塞ぐだけの魔法なのだ。だがそれで、十分だった。

「故に、執行する……！」

エリザールの語気が変わった。強く、決然たる声音。

大気が揺らいだ。

「まさか……！？」

カナンは、ある予感に目を疑った。それはさすがに許されないはずだ。だれもがそれを許しはしないはずだ。その力の行使を。その力の顕現を。

漆黒の人波の中から、膨大な光が、波紋となって走ってきた。光の波紋は、多重同心円として地面に固定される。光の同心円の中に浮かび上がるのは、無数の神秘言語。理解しがたい文字の羅列は、光の円の中で複雑に絡み合い、紋様を描き出していく。

それは、魔方陣のように見えた。

天が割れた。

空を埋め尽くしていた積雲を吹き飛ばしたのは、一条の光。

莫大な金色の光は、地上に描き出された魔方陣へと突き刺さると、光の柱となって聳え立った。

光の柱がもたらしたあまりにも膨大な力が、空間を歪めていく。大気が震え、大地が揺らぐ。

それは、顕現する。

「エリザール……それはやりすぎだ」

極めて冷ややかに告げながら、カナンは、目を細めた。

光の柱が、地上の魔方陣ともどもに消滅した。

それは、とてつもなく巨大な物体だった。全長二十メートルを優に超す巨軀は、全体的に分厚い耐魔法装甲に覆われており、異常なほど膨大化した全身鎧のようにも見えた。所々から覗く突起物は、破壊的な砲口に違いなかった。

顔面は仮面に包まれ、表情は読み取れない。四つに増えた腕には、それぞれ異なる武器が握られていた。

右側の手には波形の刀身が特徴的な長剣と穂先が三叉に分かれた投槍、左手には表に炎の紋章が描かれた円形の盾と、稲妻を模した杖。どの武器も非常に巨大ではあったが、危険なのはその大きさではない。武器に秘められた力が問題なのだ。

背部からは一対の巨大な翼が広がっており、その大きさは、自身の巨体を覆い隠せるくらいだった。そして、背後に展開する三つのエンジェル・リングもまた、その巨軀に比例するように大きい。

その巨体を二本の脚で支えるのは無理があるのだろう——巨軀は、空中に浮かんでいた。

「対悪魔殲滅外装《聖軀^{せいく}》……」

カナンは、それを指し示す言葉を口にしながら、記憶が呼び覚まされていくような感覚を覚えた。

——空を埋め尽くす、さまざまな姿形をした《聖軀》の軍勢。《彼》が用意した最高戦力たち。その機動する空中要塞群の中で一際異彩を放つのは、ただひとり、己が美貌を誇らしげに見せ付ける美女の姿——

「馬鹿だよ、おまえ」

カナンは、冷酷に告げた。

「神勅もなく《聖軀》を持ち出したんだ。ただで済むと思うなよ？」
エンジェル・リングをさらに展開して、後背に三重の光輪を形成すると、カナンは、いくつもの魔法のイメージを脳裏で構築していく。

前方で、空中要塞のような巨軀が、動き出した。

「わたしはドミニオン・ラザクルが力天使エリザール！ 《天帝》など恐れるものか！」

拡声器でも使ったかのような大音声を、カナンは、冷やかに聞いていた。彼女の主張には胸中で同意しておく。

（そりやそうだ）

不意に《聖軀》の右手から、三叉の投槍が投げ放たれた。雷光の尾を引きながら高速で飛来する投槍は、全長十メートル以上はあった。軌道は直線。

（安い牽制だな！）

カナンは、即座に左腕を繰り出した。同時に魔法を完成させる。

「呪縛の幽姫よ」

手の先の虚空に、大きな歪みが生まれた。それは、対象が接触することで発動する設置型拘束魔法。

投槍が、空間の歪みへと突っ込んでくる。

（例え殲滅兵装だろうが……捕縛する！）

改心の笑みとともに、カナンは、続いての攻撃魔法を放つために右腕を掲げようとした。

「甘い！」

エリザールが叫ぶより早く、三叉の投槍が、穂先から三つに分かれた。三本の槍は、それぞれ別方向へと軌道を変化させる。

急激な曲線。

「!？」

予想外の事態に、カナンの反応がわずかに遅れた。

「聖なるかな」

上空から急速落下してきた投槍が、カナンの掲げていた左腕の肘から先を吹き飛ばした。

「聖なるかな」

カナンの後方へ通り過ぎた投槍が、強引な転進によって、カナンの背中に突き刺さった。

「聖なるかな」

下方へと落ちていったかに見えていた投槍が、急上昇によってカナンの首筋に突き刺さり、頭部へと達した。

「万軍の主よ。天と地はあなたの光栄にあまねく満ち渡る——」

破滅的な痛みの奔流の中で、カナンは、エリザールの歌声を聴いていた。感覚も意識も、なにかもが遠のいていく。

「されどここは夢の王国。あなたの威光も届かぬ樂園。我らが主天使の箱庭」

世界が、遠ざかっていく。

「故に、《悪魔》の命数もここに尽きる」

闇が、カナンのすべてを包み込んだ。

第四夜 悪しき夢の淵へ（1）

彼が目を開けて最初に認識したのは、白いということだった。

とにかく白いのだ。

なにもかもが白い。

天井も、壁も、床も、扉も、ベッドも、シーツも、彼が身につけている衣服も、白一色だった。病室だから白いのは当然だといわれれば、それまでなのかもしれないが。

ただ、風に揺れるカーテンだけが空色で、それだけがこの奇妙なほどの白さの中で、あざやかな色彩を帯びていた。

壁にかけられた白い時計を見ると、ちょうど十時を回ったところだった。窓の外は明るい。午前中には違いない。

彼は、上体を起こして軽く伸びをしようとしたが、左腕の肘から先が失われたことを思い出して、やめた。体を無理に動かすのはよくない、と医者から言われてもいたのだ。

十台半ばの少年だ。艶のある黒髪は長めで、深い睫毛に縁取られた青い瞳は、どこか醒めたように感じられるだろう。

体つきは貧弱ではないにせよ、痩せ型ではあった。その華奢な全身の様々な箇所を包帯で覆われており、重傷であることが伺われた。まず目につくのは、左腕だろう。肘から先が綺麗さっぱり失われていた。

つぎに、首筋から頭部の左半分が包帯で覆い尽くされていた。

最後は、胴体。白い館内着に隠されており、外からは確認できないが、包帯が幾重にも巻きつけられていた。

「にしても、重傷だな……」

彼は、自分の体の有様に、呆れて笑うことしか出来なかった。それだけが、彼に許されたわずかばかりの自由だとも言えた。

彼は、みずからの意志でこの小さくて真っ白な空間から抜け出すことを禁じられていた。

理由は知らない。

聞いても、教えてくれないのだ。

理由など、無いのではないか。外出を禁止する理由も、病室に閉じ込めておく理由も。

そんな気がしてならないのだが、彼がそんなことを言ったびに、

彼の女友達はこう告げるのだ。

「理由ならあるだろう？」

きわめて真面目くさった表情で。

「おまえが《悪魔》だからだ」

そして、腹を抱えて笑うのだから、質が悪い。

少年は、ベッドに仰向けに寝転がると、純白の天井と睨めっこした。その辟易するほどの白さを汚すために、右手を掲げて視界に入る。

「《悪魔》……《悪魔》ねえ」

彼は、嘆息するようにつぶやいた。彼女の言うことを信用するわけではない。そもそもただの冗談に違いないのだし、そんなものがこの世に実在するのなら、一目お会いしたいものだった。

「《悪魔》なら、どんな願い事だって叶えてくれるもんな」

それは少し違うような気がしなくてもなかったが、彼には、結局どうでもいい話に違いなかった。

日がな一日、この病的なまでに白い部屋で過ごすのは、あまりに退屈だった。窓の外を眺めても、見えるのはこの巨大な病院の私有地である森だけだった。この部屋の窓からはそれしか見えないのだ。どこまで行っても、木、木、木、木……。時折、森に生息する動物たちの姿が見えることもあるが、それだけだった。

青々とした広大な森は、時として彼の心に平穏をもたらした。が、それ以上の心境の変化など望むべくもない。森自体、常に変わらない姿でそこにあるのだ。見ているものもまた、変わりようがない。

外出は許されなかったが、見舞い客の出入りはほとんど自由だった。

た。彼には、それがどうにも納得できないのだが、三日に一度は足を運んでくれる悪友のおかげで、気分転換ができているというのも事実だった。

もし、見舞い客の出入りすらも禁じられていたとしたら、とつくに気が狂っていたかもしれない。

ちよつとした事故で左手を失い、その上、自分まで見失うのは洒落にもならない。

事故。

そう、それは予期せぬ事故だったはずなのだ。彼が左腕を切断され、首筋と頭部、背中に重傷を負った原因。大惨事だったはずだ。でなければ、こんな状態になっているはずがない。だが。

（なんでだっけ……？）

彼は、この大怪我の原因について考えるたびに、首を傾げるしかなかった。記憶の中で、そこだけが靄がかかったように思い出せないのだ。

「いや——」

彼は、口に出して、考えを打ち消した。靄がかかってわからなくなっているのは、大怪我を負った事故に関する記憶だけではない。もっと多くの物事が頭の中から欠落していた。思い出せないのだ。が、だからといって、病院生活に支障が出るほどのこともなく、彼は、嘆息とともに右手を握り締めて拳を作った。その行動に意味などあるはずもない。癖というほどのものでもなかった。

不意に、病室のドアが軽く叩かれた。

「入りますよ」

ドアの向こう側から聞こえてきたのは、どこか緩やかな女性の声だった。

彼は、別に返事をするでもなく、伸ばしていた右腕をベッドの上に戻した。視線だけでそちらを見やる、

間もなく開かれたドアから入ってきたのは、まさに白衣の天使と呼ぶに相応しい看護師の女性だった。名は、確か御弾沙羅^{みたま・さろ}といった

はずだ。彼女は、容姿端麗という言葉が似合う女性だった。長い栗色の髪に青い瞳。化粧が薄いのは、ここが病院だということが関係あるのかもしれない。もっとも、彼女にはメイクの必要性など皆無に等しかった。彼女の碧い目が、こちらを見る。

「カナン君、調子はどう？」

沙羅の親しげな話し方は、別に嫌いではない。むしろ、ある程度なれなれしく接してくれたほうが、彼としても気が楽だった。

「ま、いいんじゃないですか？」

彼——カナンは、上体を起こすと意味もなく笑いかけた。実際、調子自体は悪くなかった。体調は良好だったし、気分も悪くはない。いまのところは、退屈さに押し潰される様子もなかった。

「それならよかったわ」

沙羅がとびきりの笑顔を向けてきたので、カナンは思わず視線を逸らした。彼女の穢れひとつない笑顔は、カナンにはあまりにも眩しすぎて、直視することは愚か、覗き見ることすら憚られるような気がした。

「なにがですか？」

「カナン君の体調次第なんだけど、外出許可が下りたのよ」

自分のことのように嬉しそうな声音で言ってきた看護士に、カナンは、目を合わせざるを得なかった。

「えっ……」

透き通った青い虹彩。呼吸が一瞬止まる。

「病院の外に出ても良いってことよ」

沙羅が、にっこりと笑う。

「もちろん、付き添いは必要だけどね」

「今日は十月一日です！」

カナンが、白一色の病室を出たのは、入院以来初めてだった。あやふやな記憶の中でも、それだけは確かなことのように思えるのだが、実際のところどうだったのかなど、瑣末な問題に過ぎない。

「^{かるなほ}軽那葉市始まって以来のお祭り騒ぎという触れ込みのカルナバン・ドリーム・パレードまで後二日に迫ってまいりました！」

興奮気味の女性アナウンサーの声は、病院のロビーにある超大型モニターからのものだった。晴れ渡った大通りを流れる人波の中で、美人アナウンサーがマイクを片手に大興奮している様子が映し出されている。

とてつもなく広い空間だった。吹き抜けのフロアには、いくつもの椅子が並べられ、入院中の患者や通院者、あるいは見舞い客たちが、好き勝手にくつろいでいるようだった。カナンの個室とは異なり、必ずしも白一色で塗り潰されているわけもない。

超大型の液晶モニターに映し出されているのは、この病院のある都市であり、カナンが生まれ育った街でもあった。

軽那葉市。

四年前の独立宣言以来、国の内外からの猛烈な反発とバッシングに曝されながらも、物凄い勢いで発展してきたという。世界でも有数の未来都市として、夢の都と謳われている。

夢。

数多のひとの夢。

それは遊ぶことであり、学ぶことであり、働くことであり、生きていくことである。

そして、それら夢の結晶として、一夜限りの夢の宴カルナバン・ドリーム・パレードなるお祭りが、十月三日——独立記念日に開催されると言うことで、市内は愚か、世界各地でも大きな話題になっていた。

「ついに明後日ね」

沙羅が、アナウンサーの街頭インタビューを一瞥して、カナンに笑いかけてきた。カルナバン・ドリーム・パレードの話題は、ほと

んどすべての市民を心の底から喜ばせるのだ。それは沙羅だって例外ではないし、カナンだって、軽那葉市民として嬉しくないはずがなかった。

「カナン君も楽しみ？」

沙羅の問いかけには即座にうなずいて、カナンは、彼女の姿にしばし見惚れた。彼女はカナンの外出に付き添うに当たって、私服に着替えていたのだ。淡いピンクの上着と、白のロングスカートが、彼女にはよく似合っているように思えた。

カナンもまた、着替えてはいた。黒いシャツにジーンズパンツというラフな格好だったが、失われた左腕と、首筋から頭部を覆う包帯はあまりにも痛々しかった。

大怪我そのものである彼へと注がれる視線は、好奇や興味、あるいは哀れみや同情といったものであり、カナンの心を少しばかり陰鬱にさせた。

もつとも、それも沙羅が着替えて出てくるのを待っている、ほんのわずかな間のことでしかない。

「行きましようか」

沙羅に促されて、カナンは、ロビーを後にした。

「どこへ行くんですか？」

カナンが沙羅に訊ねたのは、病院の駐車場に停めてある沙羅の愛用する軽自動車に乗り込んでからだった。丸みを帯びた形状が可愛いと評判の人気車種だったが、カナンにはその真っ赤な車の名を思い出せなかった。

「特に決めてないけど……そうね、カナン君が行きたい場所ならどこでもいいわよ？」

車のエンジンを始動して、沙羅。最新型の自動車なのだろう。エ

ンジンが駆動する音も聞こえなければ、車体がわずかでも震えると言うこともない。

甘い静寂が、この狭いふたりだけの空間に横たわっている。

「俺が決めていいんですか？」

「君の気晴らしのためでしょ？」

そう言っただけで微笑する沙羅に、カナンは、胸が高鳴るのを覚えたものの、極力表情には出さなかった。

「えーと、じゃあ……」

カナンは、言葉を探るように車内を見回した。簡素な運転席とは異なり、後部座席には、愛らしいぬいぐるみたちが鎮座していた。翼を生やした四足獣たち。それは獅子であり、虎であり、狼であり、馬であり、羊だったりした。

「商業区とか……駄目ですか？」

「良いわよ。ウインドウショッピングくらいしかできないけど、気晴らしにはちょうどいいかな」

沙羅は、ひとり納得したようにいうと、車を発進させた。

軽那葉市は、人口約五百万の大都市だ。

長大な円周を描く城壁の内側に築かれた要塞都市であり、戦乱の時代、難攻不落の城塞として知られたという。

その時代の名残りはもはや、都市の外周に聳える高さ十メートルの城壁しかなかったが、それだけでも一目見る価値はあるらしく、城壁を見ることがだけを目的とした観光客も絶えなかった。

市内は、業種や用途ごとに五つの区画に整理されており、中央に市庁舎を戴く直轄区、西に工業区があり、南に学業区、東に位置する興行特区は、軽那葉市最大の観光スポットとして賑わっている。

カナンたちの目的地である商業区はというと、軽那葉市の北部に位置していて、カナンが入院していた工業区の病院からは、車で三十分もかからない位置関係にあった。

沙羅の愛車の乗り心地は快適そのもので、カナンは、走り出して

十分も立たないうちにうとうとと眠りかけたのだった。が、沙羅に話題を振られたことで事なきを得る。

せつかくの外出を眠りに落ちて台無しにするなど、笑い話にもならない。

「まるでデートみたいね」

沙羅が屈託なく笑ったのは、商業区のメイン・ストリートをふたり並んで歩いているときだった。十代の少年と二十代半ばの女性では釣り合いは取れていないが、デートに見えなくはないかもしれない。

カナンは、沙羅の言葉にどきつとして、慌てて目を逸らした。

商業区は、その名の通り商業に特化した区画であり、ありとあらゆる専門店が軒を連ね、数え切れないほどの百貨店が街の至る所に見受けられた。

カナンたちのいる大通りにも無数のショップが立ち並んでおり、それを目当てにしたものなのか、平日にも関わらず凄まじいまでの人波が大通りを埋め尽くしていた。

空は晴れ渡っており、雲ひとつ見当たらない。太陽は眩しくも暖かな光を降らせており、風も穏やかだった。

まるで小春日和だったが、現実には秋そのものだ。この季節感の無さは、この極東の島国においてはありえないことらしいのだが、軽那葉市を出たことがないカナンにわかるはずもない。

「カナン君は、どんな服が好みなのかしら？」

「服、ですか」

不意に話を振られて、カナンは、返答に困った。特に好みの服装などはなかった。着ることができればそれでよいのだ。

「強いてあげれば、黒、かな」

「黒かつたらなんでもいいの？」

微笑する沙羅に曖昧な態度でうなずいて、カナンは、前方に視線を移した。

沙羅の運転する自動車は、夥しい数の人々でごった返す複雑な交

差点に差し掛かっていた。ビルの壁一面に設けられた巨大な街頭ビジョンが、カナンの目に飛び込んでくる。その画面に映し出されているのは、なぜか、いま巷で人気の海外ドラマだった。街頭ビジョンでドラマを放送することなどありえるのだろうか。それも、海外ドラマだ。

天使と悪魔の戦いを題材にしたもので、名前は確か――。

「《夢の国のカナン》よね。わたしも毎週欠かさずに見てるわ」
沙羅の言葉が、カナンの頭の中で反響した。

第四夜 悪しき夢の淵へ（2）

《夢の国のカナン》。

そう、確かそんな名前のドラマだったはずだ。人気ドラマの主人公の名前がカナンと同じということで、いじられることも多々あった。

不意に、カナンの周囲が歪んだ。

一瞬、あらゆる音が途絶え、目に映るすべての映像が乱れた。ほんの一時。刹那といってもいい。

（なんだ……これ？）

突然訪れた奇妙な感覚の中でも、カナンは、街頭ビジョンを食い入るように見ていた。目をそらすことは許されない。そんな強迫観念が彼の行動を縛り付けていた。理由などわかるはずもない。

街頭ビジョンに映し出されていたのは、主人公カナンと敵対する天使の戦いの場面だった。VFXの限りを尽くした大迫力の戦闘シーン、この海外ドラマを一躍トップに押し上げた最大の要因だった。

まるでハリウッド映画のような——とは、《夢の国のカナン》を評する上で、極めてよく使われる言葉であり、それこそ、このドラマのすべてであるかも知れなかった。

ストーリーは陳腐なものであり、勧善懲悪からは程遠いにせよ、善悪二元論に終始する物語には批判の声も多い。

が、それでも人気なのは、その陳腐でありきたりなストーリー展開にも、なんらかの魅力があるからなのだろう。

街頭ビジョンでは、巨大な要塞の化け物のような天使が投擲した鎗が、三つに分かれ、主人公の肉体を粉々に打ち砕いたところだった。

カナンの左腕と、首筋、体の傷痕が疼く。

「先週の放送ね。主人公、あのまま退場するなんてことはないわよ

ね？」

沙羅の言葉など、もはやカナンの耳から滑り落ちるだけだった。不愉快な痛みの中で、なにかが、カナンの脳裏を駆け抜けていく。

断片的なイメージ。

遙か前方に浮かぶ《聖軀》の巨軀——投げ放たれた槍——対抗するための魔法——うかつな失敗——。

それは、既視感というのかもしれない。

（なんなんだ……？）

わけのわからない不思議な感覚の中で、それでもカナンは、街頭ビジョンから目を逸らせずにいた。見なければならぬ。見続けなければならぬ。そんな使命感にも似た衝動が、彼の思考を硬直させている。

その街頭ビジョンでは、天使が勝利の凱歌を上げたところだった。場面転換。

つぎのシーンは、謎めいた少女が走る姿からだった。漆黒の人波を掻き分けながら、ただとにかく前進する少女。彼女は、その夢の都の中心を目指している様子だった。

夢の都ガルナバ。

その工業区のメイン・ストリートを埋め尽くすのは、漆黒の葬列であり、沈黙の人波だった。一歩前に進むことすら困難に見えたが、それでも、少女は諦めていないようだった。

ひたすらに、喪服の群れの中を掻い潜って前進する。中央部と周縁部を分かつ巨大な城門は、既に彼女の前方に見えていた。

分厚い城門は開かれており、大量の葬列は、その中に吸い込まれるようにして入っていく。

少女もまた、城門の中へ向かおうとした。しかし。

『駄目ですよ』

栗色の髪の子天使が、少女の進行方向に降り立った。その周辺の人波だけが、ぽつかりと穴が開いたように消え失せている。いや、それは少女の周囲も同様だった。

天使。

そう、天使。神の使いであり、光の使者であり、法の門番であり、天の尖兵たる人知を超越した存在。

純白の衣を纏い、背に後光の如き光の環を浮かべ、右手には炎の剣を持ち、美しい顔には愛に満ちた慈母の如き表情を浮かべていた。
『これ以上は駄目』

天使が、紅蓮と燃え上がる剣先を少女に向ける。しかし、少女はたじろがない。強いまなざしで、天使を見据える。

『どうして？』

毅然とした態度で訊ねる少女に、天使が、透明な青さを湛えた目を細めた。

『それは――』

『その娘が夢の鍵』

天使の言葉を断ち切るように降ってきたのは、居丈高な女の声であり、その美しい肢体だった。長い銀髪が流れるようにきらめき、画面を彩った。

『そういうことなんだろう？』

天使と少女の間に降り立った女が、冷やかに告げた。性別に係なく魅了するほどの完璧な容姿を誇る、黒衣の美女。

『な！？』

天使が、驚愕のあまりその美麗な表情を崩した。が、それも一瞬の反応に過ぎない。睨み据えながら、右手の剣を女に突きつける。

『なぜあなたがここに……リリスⅡラグナガーデン！』

名を呼ばれた女は、なぜか頬を赤らめながら、しかし、苛烈なほどの激しさで叫んだ。

『わたしを支配できるのはあのお方のみ。そこが例え地獄であろうとも、そこが例え夢の国であろうとも、あのお方がそれを望む限り――』

天使へと踏み込む女の右手には、いつの間にか刀が握られていた。刀身が硝子のように透き通った刀は、特殊効果で青く発光している

ようだった。

『わたしはわたしだ！』

女が宣言と共に繰り出した神速の斬撃は、天使に回避行動を取らせる間も与えず、その右腕を肩から斬り離れた。

暴力的なシーンは、このドラマの見どころのひとつだった。

肩の断面から噴き出すのは、鮮血ではなく、閃光。奔流の如く噴出する光が、街頭ビジョンを白く塗り潰していく。

「おまえほど支離滅裂な奴が、ほかにいるかよ」

あきれたままにつぶやいて、カナンは、はっと我に返った。自分の口から滑り出た言葉の意味が、まるでわからない。

天を仰ぐ。

雲ひとつ存在しない空は真っ青で、カナンの心に生じた不安を吸い込んでくれるような気がした。

しかし、それも一瞬のことに過ぎなかった。

不意に、カナンの視界に光が差し込んできた。爆発的な輝きは、すぐ右隣から――。

「！」

カナンは、沙羅を振り返った瞬間、驚愕のあまり言葉すら出なかった。

「どうしたの？ カナン君。わたしの顔になにかついてる？」

沙羅が、小首を傾げる。いつもの微笑を浮かべて。いつもの優しい声音で。

いつもと異なるのは、右腕がいつの間にか失われていたことであり、その肩の傷口から、強烈な光が、鮮血のように迸っていることだった。

さつき見た海外ドラマの天使そのままに。

しかし、沙羅は、そんなことに気づいていないかのように笑っていた。

「なんなんだよ、いったい！」

混乱とともに叫んで、カナンは、沙羅の変わらぬ微笑に恐怖すら

覚えた。なにが起きたのかはわからなかった。目の前の人物が、ドラマの中の人物とまったく同じ状況に陥るなど普通ではない。異常事態。それもかなりのの。

沙羅は、変わらぬ笑を湛えたまま、優しい言葉を投げかけてくる。「さつきからどうしたの？　だいじょうぶよ、なにも怖くはないのよ？」

なんともいいよのない微笑。彼女の置かれている状況さえ考えなければ、ずっとその笑顔を見ていられただろう。それはそれで幸福な時間に違いない。何も考えず、至上の笑顔を眺めていられるのだ。至福と言ってもいい。

だが、カナンは、静かに後退りした。圧倒的な誘惑をなんとか振り払い、彼女と距離を取ろうとする。そうしなければならぬ気がした。いますぐ沙羅から逃げ出さなければ、なにかもが失われる——そんな予感があった。確信に近い。

カナンはふと、交差点を行き交うひとびとの視線がこちらに集中していることに気づいた。

それは当然の出来事に違いない。

女が、右肩から光を放出しているのだ。尋常ではない。驚いて目に止めることは愚か、ちよつとした恐慌が起きたとしてもおかしくはなかった。女の肩から光が噴出しているのだ。街頭ビジョンに映し出された天使と同様に。

しかし、違和感があった。

（いや……？）

カナンは、改めて衆人の視線が向かう先を確認した。手を繋いで横断歩道を渡る恋人たち、歌でも口ずさみながら踊るように進む子供たち、仲睦まじく腕を組む老夫婦、数え切れないほどの学生たち。それらすべてのまなざしが見据えるのは——。

（俺だ！）

彼は、目を見開いた。視界が広がり、数多の情報が網膜から脳裏へと伝達される。夥しい数の双眸が、瞬きひとつせずにこちらを凝

視している。それだけではない。無数の人の群れが、ゆつくりと、こちらに向かってくるのを認識する。その速度は遅々たるものだったが、彼らの目指すものがカナンである以上、このまま放っておくこともできない。

カナンは、沙羅を一瞥した。

光を放つ女は、歪な笑みを浮かべていた。見るものの神経を逆撫でするような、不安定な微笑。いつの間にそんな不気味な表情になっていたのだろう。さっきまでとは百八十度意味の異なる微笑だった。

もしかすると、沙羅は最初からそんな顔でこちらを見ていたのかもしれない。

カナンは、頭の中を過ぎった考えこそが正しいような気がして、愕然とした。そして、自分が多少なりとも冷静さを取り戻していることに安堵する。状況に飲まれてはいけない。自分を見失ってはいけない。

（自分……？）

胸中で自問して、彼は、自分の頭の中に事故に関する情報がほとんどないことを思い知る。漠たる不安が圧倒的な勢いで押し寄せてくる。自分とはなんだ？ カナンとはなにもので、なぜ、このような訳の分からない状況の渦中にいるのだろう。

沙羅が、こちらの考えを見透かしたかのように言ってくる。

「あなたはカナン君。大きな事故で重傷を負い、わたしの働く病院に運ばれてきた少年——それ以外の情報なんて、必要ないでしょう？」

「いや」

カナンは、即座にかぶりを振った。それは否定しなければならぬ。い。なんとしてでも。

「それじゃあ駄目だ」

「どうして？ それでいいじゃない。楽園の日々を過ごすなら、それだけで十分でしょ？」

沙羅は、笑みをまったく崩さない。いや、そもそも、彼女の笑みはとつくに崩壊していて、それが、カナンの意識を掻き乱すのだ。混乱がある、自分がなにもので、この世界がなんなのか。記憶に残るわずかばかりの情報が頭の中に散乱し、渦を巻いて混乱を加速させる。口について出る言葉は、本心なのかどうか。

「これのどこが樂園なんだ？」

吐き捨てるように言って、カナンは、沙羅に背を向けた。駆け出す。瞬間、殺気を感じたものの、気配如きで動き出した肉体を止められるはずもない。

「待ちなさい！」

沙羅の叫びは、悲鳴のようですらあったが。

「待てと言われて待つ奴があるかよ」

カナンは、もはや止まらない。とてつもなく広い交差点を埋め尽くす人波を掻き分けながら、前進する。無数のまなざしは、カナンに張り付いて離れない。が、なにをしてくるわけでもなく、ただ、見詰めて、追いかけてくるだけだ。

進行を妨げることもない。

『おまえたちは、あれで彼を倒したつもりらしいが、それはどうだろうな？』

リリスⅡラグナガーデンの冷笑が、頭上の街頭ビジョンから降り注いでくる。

カナンは、その女の声が、ひどく聞き慣れたもののように想えた。突然に、だ。さっきまでは、なんとも思っていなかったはずなのに、だが、いまでは極めて愛しく、どうしようもなく憎たらしいものに想えた。

この複雑な感情は、なんと呼べばいいのだろう。

『あんなもので、あんな頼りない兵器で、あのお方の奇跡の片鱗ですらない哀れな玩具で、彼が倒せるものか。殺せるものか。滅ぼせるものか』

カナンは、ふと背後を振り返った。沙羅の動向が気になったのだ。

しかし、カナンの視界を塗り潰すのは、虚ろな無数の双眸だけだった。意志なき瞳。まるで操り人形のようにだ。

（沙羅は……？）

木偶のようなひとの群れの向こうに、沙羅の姿は見当たらない。

『彼は、わたしが全力で以てしても滅ぼせなかった唯一の《悪魔》だぞ？』

殺意は、頭上から――。

「駄目よ」

カナンが振り仰ぐと、晴天を背後に浮かぶ沙羅の姿があった。背に光の環を負い、左手に炎の剣を握っている。右肩からは、いまだに光を放出し続けていた。

まるでドラマの中の天使のように。

「あなたは沈む。この夢の果てに」

沙羅の宣告が響くのと、カナンがなにものかに背後から羽交い絞めにされたのは、ほぼ同時だった。

「なんだよ！」

カナンの動きを封じたのは、男の手であり、女の手であり、子供であり、老人であつた。

気づくと全周囲から、虚ろなまなざしのものたちが、カナンへと押し寄せてきていた。

「離せっ！」

カナンは、全力で振り解こうとしたが、組み付いてきたものたちが離れる様子はなく、それどころか、より強く絡み付いてくるのだつた。どう足掻いても外れない無数の手に苛立ちを隠せず、カナンは、怒号を発しようとしたが、止めた。止めざるを得なかった。

頭上で、天使が剣を振り翳していた。紅蓮と燃える剣は、晴れ渡った空に浮かぶもうひとつの太陽のようにも見えなくはない。

「夢幻に眠りなさい。無限に。無限に」

沙羅が、カナンに向かって落下してきた。燃え盛る切っ先をこちらに向けて、まっすぐに降ってくる。

かわしようがない。

「なんだよ、これ」

カナンには、嘆息しかなかった。諦観というわけでもない。逃れようのない結末を前に、しかし、悲壮感もなければ、絶望感もない。なぜだろう。

夢を見ているような感覚があるからかもしれない。

もっとも、その夢は悪夢には違いない。こんな夢が良い夢であるわけがなかった。良い夢というのはもつとこう、心地いい世界であるべきはずだ。しかし、彼の望んだ樂園などどこにもないのだということもわかつている。夢を望み、挑んだ。しかし、彼は敗北してしまった。敗残者が栄光を取り戻すことなど許されるわけがなかった。地の底へ落とされたのだ。底の底へ。這い上がることさえできない深淵へ。

「そうか……そうだった」

カナンは、眼前に迫り来る炎の剣を見据えながら、自分というものを思い出し始めていた。愚かな夢を見て敗れ去った哀れな化け物。成れの果て。残骸。彼は、己がこういうものか思い知って、苦笑を浮かべた。そして、天使の炎の剣が頭部に突き刺さり、頭蓋を割り、脳髓を焼き尽くしていくのを認めた。

そんな中でも、あの声だけは聞こえていた。とてつもなく懐かしく、忌々しいほどに愛おしい女の声。

相對する天使を嘲笑う、光。

『この世で最も傲慢で、限りなく欲深な上に、狂おしいまでの嫉妬に悶え、燃え盛る憤怒に身を焦がし、情欲は尽きることを知らず、呆れるほどの怠け者にして、常軌を逸した大食らい——どうだ？こんな奴に勝てると思うか？』

（全然褒めてねえよ、それ）

苦笑と共に、カナンの意識は紅蓮の炎に焼かれていった。

第四夜 悪しき夢の淵へ（3）

「けれど、墜ちましたよ」

リリスは、力天使が目を細める様子を冷やかに見ていた。こちらの置かれた状況は悪くなる一方だったが、それでも余裕を失うつもりはない。意識は透明。澄み渡る感覚がすべてを冷徹に把握している。

力天使が、右肩の切り口から噴出している光を変形させてみせてきた。どういう原理なのかはわからなかったが、ともかくも、光は、美しい翼を構築していく。光の翼。天使が掲げるには相応しいものではあった。

間合いは、五メートルほど。

「たった今」

力天使が、光の翼を広げた。光の粒子が羽毛のように舞い散る。それと同時に、右腕もろとも地面に落ちていた炎の剣が、彼女の左の掌中に出現する。真紅の刀身は燃え盛る炎を象徴し、柄頭に輝く紅玉もまた、紅蓮の猛火を想起させた。

「墜ちた？」

リリスは、背後の少女の動向にも注意しながらも、力天使を嘲笑った。力天使の勝ち誇る様が余りにも滑稽だった。笑わざるを得ない。あまりに哀れ。あまりに無残。これが本来の在り方を忘れた天使の有様なのだとしたら、リリスとて口を歪めるしかなかった。

力天使が、炎の剣を目線の高さに掲げた。刀身が紅蓮の火炎そのものたる剣は、天使に対しても有効な攻撃手段となる。肉体だけではなく、魂に直接攻撃を加えるという意味において。

とはいえ、リリスの両手に握り締められた長刀が、炎の剣如きに負けるはずもない。

リリスは、目を細めた。

「どこへ墜ちたというんだ？ あれ以上どこへ墜ちるといいうんだ？

彼は投げ落とされたんだぞ？ 陰府^{よみ}へ。墓穴の底へ」

力天使が、リリスに向かって突っ込んできたのは、彼女が台詞を紡ぐ最中。力天使は、光の翼で自身の前面を庇い、翼の隙間から炎の剣を突き出すという体勢で突進してきていた。攻防一体。こちらの迎撃を光の翼で受け流さそうというのだろう。

リリスは、猛然と突っ込んでくる炎と光の塊に、ただ冷徹なまなざしを投げた。

「地獄の主たる彼を落とすなど、考えるだけ無駄な話だ」

リリスは、力天使の突進を避けようとしめない。炎の剣の切っ先が眼前にまで迫ってきた瞬間、無造作に刀を振るった。剣光一閃。横薙ぎの斬撃は、炎の剣の腹に直撃し、激しい火花と金属音を散らせた。強力な斬撃で弾かれたことによって、突進の軌道が変わる。

熱風がリリスの頬を撫で、長い髪を揺らめかせた。

リリスは、あらぬ方向に飛んでいった力天使を目で追った。左。

突撃を阻止された天使は、視線の先八メートルほどの地点でようやく立ち止まることができたらしい。

「現に今！」

力天使が声を荒げながら、リリスに向き直ってきた。光の翼を大きく広げ、炎の剣を頭上に翳す。柄頭の紅玉がまばゆい光を発した。光は一瞬にして爆炎となり、渦を巻きながら剣の切っ先へと収斂していく。火球が生まれた。火球は、力天使の頭上へと浮上しながら、急速に膨張していった。

その火球の発する熱気は、周囲の気温を急激に高めるほどだった。「夢だろう？ ここは」

つぶやくように言っ、リリスは、力天使を見据えたまま後方に飛び退いた。軽い跳躍で、鍵の少女の背後に辿り着く。少女が驚いたようにこちらを仰いだ、いまは無視しておく。相手をしてやるゆとりはない。

リリスは、爆発的な勢いで膨れ上がる火球を仰いでいた。

「どれもこれもがユメマボロシの塵芥^{ちりあくた}なら、わたしの小さな願いも

かなうのだろうか？」

それは本当に小さな願い。叶おうとも叶わずとも構わないくらいの望み。夢を見ないはずの彼女が見たいつかの幻。

リリスは、刀を足元に突き立てると、静かに言葉を紡ぎ出した。

「起動せよ、我が攻撃意志」

その言葉は、必ずしも口にしなければならないわけではない。しかし、彼女は決まって、その語句を音に乗せた。

そう、それは儀式だ。

「展開せよ、我が防衛意志」

彼女が力を解き放つための。

「詠唱せよ、我が殲滅意志」

そして、リリスの後背に四重の光輪が発現した。淡くも美しい輝きを帯びた四つの輪。エンジェル・リング。高速で回転する神秘言語の群れは、出現すると同時にリリスの思考を読み取り、彼女がイメージするがままの術式を構築していく。

「全力とはいかない、か」

リリスは、本来とは比べるべくもないエンジェル・リングの数に軽く肩をすくめた。光輪から前方へと視線を移す。力天使の頭上に形成されたのは、小さな太陽の如き火球。その熱量は凄まじいものであり、周囲の建物が融解を始めていた。それほどの熱量が発せられているわけでもあるまい。

夢の演出に過ぎない。

でなければ、リリスや少女にもなんらかの影響が出ているはずだった。強烈な熱気こそ感じるものの、それが命を脅かすほどのものではないのは火を見るより明らかだ。つまり、建物を融解させるだけの熱量を発しているわけではない。

とはいえ、彼女は、多少は警戒した。過剰に演出されているとはいえ、あの火球をともに食らうのは論外だ。肉体だけでなく、魂までも焼かれかねない。それは笑えない事態だ。

もちろん、真に警戒すべきは、後方から接近してくる哀れな兵器

のほうだったが。

「まったく、厄介なものを押し付けてくれる」

リリスは、嘆息すると、こちらを見上げている少女へと視線を向けた。眼が合う。なんの感情も見受けられない、虚ろな瞳。青い瞳。まるで魂の所在すら忘れたような。人形のような。

「さて、君は何者なのだろうな」

「わからない……」

少女が、困惑気味に首を振った。その表情から読み取れるのは、少女が虚偽を告げているわけではないということ。そして、彼女がこの夢の世界の全てを知っているわけではないということ。

自分のことすら理解していないものが、夢のすべてを把握しているようには思えない。

「だが、彼が見出したのだ。この夢の成れの果てで。虚ろな楽園でいつ、どこで、どうやって見出したのかはわからない。本人ではないのだ。わかるはずもない。もしかしたら偶然、ちょっとした拍子に見出したのかも知れなかったし、本人には見出したという感覚すらもないのかもしれない。

いずれにせよ、彼に直接聞くのが早い。

そのためには、この状況を打開しなければならない。

「わたしと、数多の背約者以外なにも見出さなかった彼が、唯一の例外として見出したのが君だ。それには、何らかの意味があるということに他ならない」

リリスは、左手で少女の体を引き寄せると、右腕を前方に掲げた。力天使の火球の大きさは、既に半径五メートルほどに達していた。轟然たる猛火の塊。ともに喰らえば、一溜りもない。身も心も焼き尽くされ、再起不能に陥る可能性だってあった。

夢の世界とはいえ。

いや、むしろ夢の世界だからこそ、魂へのダメージは大きい。

「さあ、行きますよ」

力天使が、いつになく強い口調で告げてきたものの、リリスは眉

ひとつ動かさなかった。四つのエンジェル・リングは正常に機能していた。術式は完成している。

彼女は、魔法を発動するために呪文の結尾を口にした。

「我が魔弾は汝を射抜く。幾度となく。幾度となく」

「彼は、本当に墜ちたのかね？」

突然の言葉だった。

男の声は、きわめて重く静かなものであり、注意していなければ聞き逃してしまいそうな気がした。しかし、決して聞き逃すことはないのだろう。そういう声音だった。そして、穏やかで威圧感など微塵もない。とても、この都市を支配する人物が発した声音とは思われなかった。

「うん。墜ちたよ。彼は墜ちた」

クオン＝シオンは、目蓋を開くなり、相手を確認することもなく答えた。視認せずとも分かっているのだから、わざわざ視界に入れるまでもない。別に目に入れるのが嫌だ、というわけでもない。すぐに答えるほうがいいだろう。その程度の判断。

「君への忠誠に燃える力天使たちが、射落としたんだ」

クオンは、あくびを漏らして、軽く伸びをした。狭い執務室の片隅に置かれた応接セットの、柔らかすぎて逆に座り心地の悪いソファの上。

天井から降りしきる蛍光灯の明かりが、少し目に痛かった。現実とはこんなものだろう。疲労はない。健やかな眠りは、肉体的な疲労も、精神的な消耗も、あざやかに埋め合わせてくれた。

奇妙なものだ。

「まさか《聖軀》まで持ち出すとはね。さすがに今の彼では敵わな
いか」

それは嘆息に違いなかった。期待はずれの結果にはため息しかで
てこない。が、それもある程度は予想できていたことだ。不完全な
《悪魔》になにができるというのか。

クオンは、上体を起こすと、ソファに座りなおした。視界にある
のは、壁際に配置された対のソファ。相手は、クオンの少し後方に
いるのだらう。姿はまるで見えなかった。

「ちよつと残念」

「それは仕方がないだらう。すべては夢。夢にはなにものも敵わな
い。天使も、悪魔も、あるいはあのお方すらも」

男の言い様に、クオンは、くすりと笑った。相手の耳に届かない
ほどの小さな笑みだった。一見すると笑っているのかどうかさえ定
かではない、微々たる表情の変化。別に隠すつもりもない。そして、
男もクオンの笑みを拒絶しないだらう。彼が例え、こちらの思惑を
理解していなかったのだとしても、クオンの在り方を否定すること
はできない。

そしてクオンは、肯定した。

「そうだね」

ソファから立ち上がり、視線を移す。飾り気のない質素な壁から、
後方へ。

「君の夢が、すべてを撃ち落とす。愚直なまでに敬虔な天使たちを。
愚昧なまでに我侷な悪魔たちを。《天帝》を。《悪魔》を」

執務室の奥に、男が立っていた。やはり簡素なデスクの向こう。
こちらに背を向けて、一面ガラス張りの壁から町を見下ろしている
ようだった。中肉中背。見事なまでの白髪が、電灯に照らされてい
る。

「すべては君の思い通りに進行している。夢も現^{うつ}もなにもかも。彼
と彼女の介入も、もはや関係なくなつた。いやむしろ、あのふたり

のおかげで、君の夢は加速した」

男が、こちらへと向き直った。背後の窓には、滝のように降り注ぐ豪雨が嵐の到来を予感させたが、それすらもいずれそよ風に過ぎなくなるのだろう。嵐など起きない。

夢が、システムの暴走さえも握り潰す。

「ああ。その通りだ」

男が、クオンの言葉を肯定した。見た目には初老の男。しかしその肌艶は、年相応のものではないだろう。切れ長の眼には、緑色の虹彩が輝いて見えた。

ラザード。

「散逸していたはずの夢がひとつになって現れた。それもこれも、彼が夢を荒らしてくれたおかげだろう」

彼が、笑うでもなく続けた。

「感謝しなくては……な」

闇。

闇。

闇。

音はなく、色もない。

闇。

ただの闇。

黒き闇。

無限の闇。

永遠の闇。

（ここは……どこだ……？）

闇の中で、カナンは、だれとはなしに問いかけた。自問ではない。だれかに問う。答えが返ってこないことなど理解していたが、それでも問わずにはいらなかった。

肉体を包む浮遊感、この闇の中の重力が微量であることを示しているのか、あるいは自身が無意識のうちに魔法を行使していることの証明なのか。魔法ならば、重力の中和くらい造作もない。初歩的な魔法と言える。

疑問が湧く。

（魔法……？）

よくわからない言葉ではあった。世界を運営する法則に干渉する力。歪な力。それを魔法と呼ぶ。魔法。魔なる法。悪魔の法理とでもいえばいいのだろうか。では、天使たちが歌う神秘言語の羅列は、なんと言いつけすべきなのか。

神の法？

天使の法理？

（いや、問題はそこじゃない）

彼は、苦笑を漏らした。無音の闇の中では、声すらも響かなかった。いやそもそも、音声が体外に発生しているのかさえ怪しい。

問題は、もつと根本的なことだ。

（魔法なんて使えたわけ？ 俺……）

思い返してみても、まったくわからないのだ。

自分を定義するのであろうカナンという名前以外、なにも思い出せなかった。さっきまでなにをしていたのか、どこにいたのかさえわからない。頭の中が無明の闇に覆われていて、記憶を探し出して拾い集めることすら許されなかった。

不安が生まれた。

不安は瞬く間に焦りとなって、彼の心に影を落とした。焦燥感が全身を駆け巡り、思考回路が迷走を始める。暴走といってもいい。数多の考えが脳裏を錯綜し、無数の声が耳の奥で散乱した。幻想が乱舞し、虚像が饗宴する。

幾多の街並みが見えた。その中を疾走する彼がいた。誰かを追って。誰かに追われて。ときに疾駆し、ときに飛翔する。魔法を行使し、破壊と混乱をもたらす。街並みが壊れていく。天使達が降臨する。再び、破壊の嵐が巻き起こる――。

（なんだ……これは？）

カナンは呻くしかなかった。なにも理解できない。なにも把握できない。なにもわからない。

自分が一体なものであるのかさえ、認知できずにいた。

不意に映像が停止し、頭の中から散逸する。

（俺は……なんだ？）

それが、自分にとっての主題だったことを思い出した。気のせいではない。確信がある。理解はできないが、確信とはそういうものだろう。そして、確信がある以上、不安はまぎれた。

カナンは、目蓋を抉じ開けた。どうやらずっと閉ざしていたらしい。もつとも、目を開けたところで、視界を埋めるのはやはり漠たる闇に過ぎず、眼を閉ざしていようと開いていようとなにも変わらなかったが。

無量無辺の闇。

それでも、カナンは目を開いた。無意識に閉ざしていた目を開いたのだ。それは大きな変化といえた。ついさっきまで目を閉じていたことすら認識していなかったのだ。変化が起きている。自身の身に。置かれている状況に。

とはいえ、眼前の闇の中になにかを見出すことなどできるはずもない。

この闇は、そういう領域なのだ。

（知っている……）

カナンは、右手を目の前まで持ってくると、視界を塞いだ。闇に変わりはない。そもそも、目の前に持ってきた掌すら見えなかった。それほどまでに闇は深く、そして重い。

それでも彼は、掌の感触に多少の安堵を覚える。掌から伝わる自

分の体温が、自身の生命が未だに無事であることを告げていた。滅びてはいない。

肉体も、魂も。

（俺はこの闇を知っている）

だが、どこで知ったのかは思い出せない。

右手だけで頭を抱えてみる。左手には、なぜか感覚がなかった。なにかがあつたのだ。左手が動かなくなるようなことが。

戦いのイメージが過ぎる。

苛烈な闘争があつた。

（苛烈？）

彼は、苦々しく笑った。あんなものが苛烈ならば、彼がこれまで経験してきた戦いはどうなるのだろう。死闘という言葉さえ生ぬるいものに成り果てる。少なくとも、この左手を失った戦いと過去の闘争を比べること自体がナンセンスには違いない。

（そう、左手は破壊された）

だがそれは、現実に見えたことではないような気がした。現実には手が粉碎されたなら、すぐさま復元していたはずなのだ。

魔法を以て。

（そう、俺は魔法を行使する）

なぜか。

それは人間ではないからだ。人間の姿に身をやつしていようと、所詮、人外は人外に過ぎない。人間が持ち得ざる、生来の力を行使することに問題があるうはずもない。躊躇うはずがない。

生き物が呼吸するのと大差のないことなのだ。手足を動かすのと同様なのだ。だが、呼吸ほど容易くはない。手足を動かすよりも、多少難解な手順を踏まなければならない。

（やっぱり呼吸とは違うか）

カナンは苦笑して、その生まれ持った力の行使を全身に命じた。エンジェル・リングの展開。

（そう、エンジェル・リング）

カナンは、背後から視界へと差し込んできた光の目映さに目を細めながら、静かに納得した。背後に浮かんだ回転する光の環が、この無明の闇を切り裂き、カナンの体を照らし出していた。闇がどれだけ深く、暗かろうと、もその光を遮ることはできないようだった。それは、無数の神秘言語が環を形成するように羅列されたものだ。人間や他の動植物が持ち得ざる器官。天使特有の器官。自問する。

（じゃあ、俺は天使なのか？）

発光する不可思議な文字列によって、闇の中に浮かび上がった右手を見下ろす。人間のそれとさして変わらない掌には、傷ひとつ見当たらない。どれだけ目を凝らそうとも、人間となにひとつ違わなかった。だが、それはおかしなことではない。天使も悪魔も、人の姿に身をやつして降臨する。

左腕は失われたままだが、それもいまや問題ではなくなった。天使の輪が起動したのだ。魔法を紡ぐだけで復元されるだろう。復元さえしてしまえば、どうということはない。この闇を打破し、帰還するのだ。

ふと。

（……？）

カナンの脳裏に、なにかが閃いた。

（なんだ？）

一条の光。

（これは……？）

稲妻のようなきらめき。

（俺は……）

それはカナンの記憶の闇を彩る、幾多の輝きのひとかけら。

第四夜 悪しき夢の淵へ（４）

「久しぶりだね、友よ。元気にしていたかな？」

黄金で塗り潰されたその空間はとてつもなく広く、ふたりきりで会合する場所にはあまりにも不釣り合いだと、カナンは思った。いつものことではあったが、そう思わざるを得ない。いや、そう考えることで不愉快な相手の声を聞き流しているつもりだった。

無論、聞き流せるはずもない。

相手の声は、そういった性質のものだった。

「急に呼び出して済まないとは思っているよ」

それは本音なのかどうか。

もつとも、カナンは、相手の内心を窺い知ろうとしなかった。

知りたくもないといったほうが正しい。それほどまでに毛嫌いしていた。顔を合わせるのも、声を聞くのも、本意ではない。

この黄金の空間に立ち入ることさえ、彼の望みではなかった。

天井も、柱も、壁も、床すらも、磨き抜かれた黄金の領域。

それはこの空間の主の威厳を引き立てるといふより、趣味の悪さを映し出しているように思えてならなかった。純金である以上、安っぽくはない。しかし、なんとも言えぬ趣味の悪さが滲み出ている。床に刻まれた紋様にしてもそうだ。大いなる愛を象徴する薔薇の紋章。黄金の床に描き出されたそれは、あまりにも煌びやかで、とても愛というものの美しさを表現できているようには見えなかった。むしろ、虚飾と欺瞞に満ちた偽りの愛に見えた。無論、それはカナンの受け取り方が悪いからに違いない。そんなことはわかっているが、それを変えようとも思わない。

これが、自分なのだ。

「しかし、こればかりはどうしようもない。我々の都合ですべてが動くわけでもない」

カナンは、ようやく相手の男を見遣った。荘厳に飾り立てられた

広間の最奥に、彼はいた。男は玉座に腰掛けており、悠然とこちらを見下ろしていた。豪華な玉座だ。地上にあるありとあらゆる宝石で飾り立てたような台座に、六対の天使の翼のような装飾が施されている、座り心地が良いようにはとても見えない。

「ようやく、か？」

カナンは、玉座へと続く赤絨毯を歩きながら、やはり自身さえも金色に染め上げた男の顔に視線を向けた。顔色を窺うというような殊勝な心がけは持ち合わせていない。ただ、見る。睨み据えるといつても過言ではないのかもしれない。

「そう。彼らが動き出した。四年前、我々に反旗を翻した彼らがね」
黄金の冠を頭上に戴き、豪華な金色の装束を纏った細身の男。玉座に腰掛けていてよくわからないが、彼は長身だ。面長で、整った顔立ちをしていた。まるで芸術家が魂を込めて彫った彫像のような、というのは言い過ぎではない。完璧な美を体現している。燃え立つような赤毛は、肩にかかるくらいには長い。

彼は、《天帝》と呼ばれた。

「それでも天使のままか」

カナンは、玉座の遥か手前で立ち止まった。距離にして十メートルほどだろう。それくらいの距離ならば、相手の表情の些細な変化も見逃さずに済む。カナンならばそれができる。常人よりは優れた視力を持っていた。もっとも、だからといって《天帝》の表情を余すところなく記憶したいわけではなかった。

「それはそうだろう？ 友よ。君と彼らは違う」

《天帝》が、軽やかに笑う。その軽さが、カナンにとっては不快極まりないのだ。なぜこうも親しみを込めることができるのか。まるで本当の友人のように振舞う男が、時におぞましく感じないこともなかった。理解できない感情のうねりに、カナンは、困惑するしかない。

《天帝》が、笑みを崩さぬままに続けてくる。

「あのお方に弓引いた愚かな君と、《封印都市》の理念を貫こうと

する彼らとは、根本からして違う」

カナンは、反論を思い浮かべる気にもならなかった。まったくその通りだ。ぐうの音も出ない。とはいえ、黙っているのも癪なのでカナンは、口を開いた。《天帝》に勝ち誇られるのは御免だった。もつとも、《天帝》がその程度のことで勝ち誇るような人物ならば、カナンがいまここにいるはずもなかったが。

「理念を貫こうとするなら結構なことじゃないか。あのどうしようもないくらいにくだらなく、救いがたい理念であろうとも、その魂を賭けて貫くのならば素敵なことだろう？」

《天帝》が、やれやれと肩を竦めたのは、カナンの思った通りではあった。こちらを小馬鹿にしているように見えて、その実全く馬鹿にしてはいない。むしろ、こちらの反応を楽しんでいるかのような雰囲気さえあった。

「友よ。君の本心がどうであろうと、彼らは我々に背いたのだ。反旗を掲げ、弓を引こうとしているのだ。その行き着く先は君にもわかるだろう？」

「……ならば滅ぼすか？ 《封印都市》を根絶やしにするか？ 大陸を再び戦火で焼き尽くすか？ この地に煉獄を顕現するか？」

「友よ。君は極論に走りがちだ」

またも肩を竦めて見せてきた相手に、カナンは鼻を鳴らした。どうでもいいことにはどうでもいい結論しか導き出せないのは、だれであれ同じだろう。カナンにとってはどうでもいいことなのだ。天使達がいかな行動を取るうが、《天帝》に対して反旗を翻そうが、彼にはほとんど関係がない。

興味の湧くような事件でもない。結果は分かりきっている。《天帝》が軍を発すれば、それだけで勝敗は決する。約束された圧倒的な勝利。なんの面白味もない。もつとも、それは大陸の荒廃と引き換えにしなければ実現できないかもしれないが。

だからこそ、《天帝》は彼をここへ呼んだのかもしれない。ふん。そもそも俺には関係がないからな。この大陸がどうなるう

と知ったことじゃない。俺はただの敗北者。おまえ如きに使役される奴隷に過ぎない」

「友よ」

《天帝》が、微笑を深くした。怖気の走るような笑み。親友に対して向けるような笑顔。その癖、彼の目は微塵も笑っていない。

「彼らの背後にクオン＝シオンの影があったとしても、そう嘯いていられるかい？」

（クオン＝シオン……！）

カナンの脳裏を過ぎったのは、美しい少年の微笑だった。儚げに最後を告げる少年の顔は、どこからどう見ても悪魔そのものでありながら、まるで世界そのもののように思えてならなかった。

純粹無垢という仮面の下に隠してきた狡猾さを曝け出すとともに、己の欲望をも露わにしていた。それはこの上なく美しいものだと言わざるを得ない。欲望とは、夢と言い換えることもできる。夢を見たがために堕ちたのだ。ならば、全身全霊でもって己が夢を掴もうとする彼の姿は賞賛に値こそすれ、非難されるいわれはなかった。

例えそれが、カナンへの裏切りによって発現した本性であったとしても、カナンには、その比類なく純粹な悪意を愛しく感じた。

もつとも、クオン＝シオンの夢を受け入れることだけは出来なかったが。

「ひとつになろう」

（それだけは出来ない。それだけは……！）

カナンは、静かにかぶりを振った。重厚な闇の中、エンジェル・

リングの淡い光だけが、彼の満身創痕の体を照らしている。

（俺は俺だ）

沈黙の中で、認識する。そう、自分はどこまでいっても自分でしかない。他者には成り得ない。ましてや、他者とひとつの存在になるなどと考えられないことだ。それはできない。それをすれば、自分は自分でなくなってしまう。

漸く獲得した自我を手放すことなど有り得ない。

（俺は俺だ）

右手を握り締めて、開く。人間のような《悪魔》の体は、人間のそれよりは多少なりとも頑丈に出来ているはずだ。土塊から生まれた人間と、光から生じた天使では、根本からして違うのだ。もっとも、《悪魔》と成り果てた以上、天使と同質であるとは考えにくかったが。

なににせよ、破壊された左腕はさつさと復元すべきだ。

それでも、叫ぶ。

（俺は俺だ！）

不意に、カナンの脳裏でなにかが弾けた。それは、記憶の奥底から堰を切ったように溢れ出てくる。無数のイメージの断片。数多の映像。幾多の音声。狂乱。恐慌。怒号。絶叫。それらは、閃光の嵐のように頭の中を掻き乱す。

荒れ狂う暴風雨に曝された無機的な町並み。

漂う力天使たち。

眠れる人間たち。

墜ちたものたち。

夢の都。

商業区の伸びやかな町並み。

クオンとサラとエリザ。

学業区のどこか窮屈な景色。

クオンとサラとエリザ。

工業区のわけのわからない光景。

闘技場。

少女。

大通り。

葬列。

少女。

夢。

すべては夢。

無惨な夢のかげらたち。

(ちっ……)

カナンは、すべてを思い出した。これは夢。愚かな夢。くだらぬ幻想。取るに足らぬ妄想。つまらぬ妄執。

(だれの夢だ？　だれがこんな夢を見ている？)

カナンは、ただ感情の赴くままに吐き捨てた。ふつふつと沸いてくるのは純然たる怒りだ。他人の夢を見せつけられているだけではなく、夢に遊ばれている。弄ばれている。これほど不愉快なことはい。

そして、カナンはこのようなくだらない夢は見ない。少なくとも、彼の夢はただひとつだった。

たったひとつ。

たった一度、夢を見た。

(リリス、おまえの言う通りさ)

カナンは、怒りを押し殺しながら、忌々しくも愛おしい女の顔を思い浮かべた。完全なる美を体現した女は、いつも難しい顔でこちらを見ているのだからやりきれない。

(《悪魔》が見る夢は、いつだってひとつだ)

それ以外のすべては、取るに足らない幻であり、飾り立てようもないまやかさに過ぎない。虚偽と欺瞞。《悪魔》の得意とするところではあったが。

(そしてサラシエル。おまえの言ったことも正しい)

夢を見たから、堕ちたのだ。

堕ちて、《悪魔》に成り果てた。

（ならさ、おまえたちも堕ちるべきじゃあないのか？）

だれとはなしに問いかけて、カナンは、苦笑した。この闇の中では、声など出るはずもない。真空というわけでもない。が、声が外に出ることはなかった。いや、出ているのかもしれない。ただ、闇は振動せず、音を伝えようとはしないのだ。

闇。

（ここは陰府……か？）

墓穴の底にたゆたうのは、無明の闇であり、一切の光を拒絶する暗黒であるはずだった。その闇に掴まれば、なにもものも声すら出せず、沈黙とともに永劫のときを過ごさなければならぬ。

無明にして無音の世界。

肉体は次第に衰弱していき、精神は緩慢に汚染されていく。なにもかもが腐敗し、崩壊していく。それでも滅びることはない。滅びることすら許されないのだ。

《彼》が下す最大の罰であるそれは、罪業を贖わせるためのものではない。ただ永遠に責め苦を与え続けるためのものだ。故に最後はない。滅びという終点もなく、未来永劫、肉体と魂が朽ちゆくのを感じ続けなければならない。

（いや……）

カナンは、エンジェル・リングの放つ輝きによって浮かび上がる己の肉体を見遣りながら、確信していた。満身創痍ではあったが、腐敗は始まってさえいなかった。精神も良好そのものといえる。記憶が復活した以上、そう考えるべきだろう。

つまり。

（これは違う）

ここは奈落ではない。冥府ではない。地獄ではない。

断じて、違う。

（ならばこれも夢……！）

カナンは、呆れ果てた。どこまで行っても夢しかないのだろうか。

この都市にあるのは、夢という名の哀れな妄執だけが横たわっているというのか。救いなどあるはずもなさそうだった。救う必要もなければ、そのつもりもないのだが。

彼は、湧き上がっていた怒りを紅蓮の炎へと昇華させた。魂より噴き出した激情の奔流は憤怒の猛火となって、たちどころにカナンの全身を包み込んだ。業火が、彼の意識に破滅的な痛みをもたらす。それは魔法などではない。

もっと別の――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0873/>

夢の国のカナン

2011年12月2日15時49分発行